



一世代

熊谷次郎
中村

歌右衛門

幸好富
北海画

通類編

第九卷



品質精選
 百貨の充實
 より御便利
 よりお安く
 奉仕第一

日本橋

松坂屋

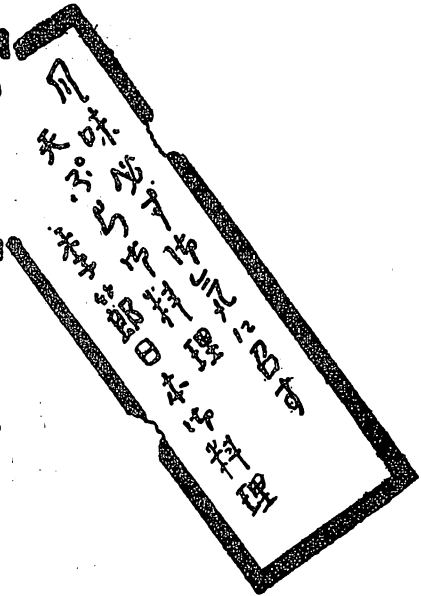
大阪

御芝居歸りには打揃ふて

お坐席では是非御會食を



吉又屋食堂



道頓堀戎げし北詰

支店

大阪支店 北新地裏町
京都支店 木屋町ドングリ橋

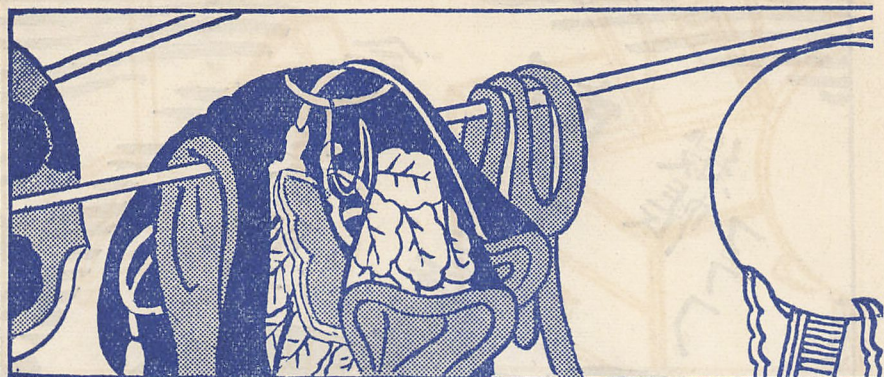
◇表紙 一の谷嫩軍記(陣屋の熊谷).....

◇中座東京大歌舞伎◇「一の谷嫩軍記」組討の場宗十郎の敦盛、喜右衛門の熊谷◇吉右衛門の熊谷◇吉右衛門の熊谷◇時藏の相模◇友右衛門の彌陀六◇陣門の場舞臺面、陣屋の場舞臺面各種◇宗十郎の敦盛◇「双面水照月」◇米吉改め「中村もしほ」、◇舞臺◇宗十郎の野分姫の靈◇「極附崎隨長兵衛」◇吉右衛門の幡隨院長兵衛◇友右衛門の水野十郎左衛門◇村山座舞臺面◇長兵衛内の場舞臺面◇湯殿の場舞臺面◇浪花座家庭劇◇「結婚第二夜」村田の妻巴子◇十次郎の竹原豊太郎◇守住の雪子◇小織の友人山下良◇「山芋が鱧」に「舞臺面◇「領の出来事」◇十吾の山駕源太◇天外の山駕榮吉◇小織の茶店の主人久保田◇賀川の技師林田隆三◇東の娘おくに◇角座、新聲劇◇「巷説化鳥地獄」山口の熊谷要藏◇伊川の長洲藩士鶴澤貞二郎◇富士野のお妻◇中田の太田黒貞◇辻野の押切猪太郎◇「誘惑時代」第二景舞臺面◇「化鳥地獄」大寶山の捕物舞臺面◇「誘惑時代」和歌浦のダンサーみさを◇樂天地田宮貞樂一派◇「飛び込んだモカ」舞臺面◇「めくら編」舞臺面◇「一夜の情」舞臺面◇文樂座◇「八陣守護城」浪花入江の段御座船◇「引窓」舞臺面◇「新口村」舞臺面◇「八陣」主計之助早打の段◇「壺坂」舞臺面◇巡業、東西合同大歌舞伎◇「勘進帖」鷹治郎の富樫左衛門◇幸四郎の武藏坊辨慶◇「封印切」鷹治郎の忠兵衛◇「樽屋おせん」魁車の伊助◇福助のおせん◇京南座第一劇場◇「女郎蜘蛛」壽三郎の田島町の龜吉◇石河の白魚のお絹



吉右衛門に寄せる

- 吉右衛門と熊谷..... 落合浪雄 (二)
- 吉右衛門の熊谷..... 岡鬼太郎 (五)
- 熊谷の回想と期待..... 入江來布 (六)
- 吉右衛門に寄する..... 遠藤爲春 (二六)
- 酒樽長兵衛と湯殿長兵衛..... 倉田啓明 (二八)



◇一の谷嫩軍記……(鸚鵡石)……………(八)

◇極附幡隨長兵衛……(芝居見たま)……………(二二)

◇双面水照月……(鸚鵡石)……………(一四)

◆双面漫考……………高谷伸……………(一一)

◇もしほ襲名……………(一七)

第總第一劇場の業績……………豊岡佐一郎……………(三九)

退脚復退脚……………森田信義……………(四二)

◇私の抱負……………中田正造……………(二七)

◇思ひ出のくさぐさ……………徳田純宏……………(二八)

◆小説 芝居 化鳥地獄……………(三〇)

◇家庭劇の更新に就いて……………曾我廼家十吾……………(二六)

◇双蝶々曲輪日記……………(文樂座九月上場床本)……………(三四)

◆鴈治郎の藝術……………富田泰彦……………(四四)

◆芝居に現れた忍術(承前)……………大澤休衆……………(五三)

□芝居 ニュース……………(四八)

□九月の劇壇……………(五〇)

△挿繪カット……………(五五)

△編輯後記……………(五五)

留振傳給旗

川島算作織

織部

梅原商店

神戸市

楠社西門

元町一六五番

電話



に粧化淡な楚+清

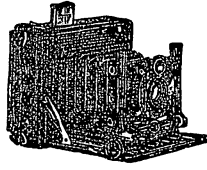
粉白水圓御新

色櫻・色肌・白純

錢十五各



圖蝶胡東伊 鋪本



よるり

面影残す繪姿不
 在りし昔の想はれて……

肖像、風景、其他凡有る物を
 写真機や小型映画に残したいと
 思召しこの時は是非共

長堀橋は南詰 小西六へ……

写真機は

- リリーカメラ 小型活動
- パールカメラ 写真機械
- アイデアカメラ
- パレットカメラ 各種在庫

(カタロン進呈)





面臺舞場の討組 "記軍城谷の一"
座中の月九・盛敦の郎十宗……………谷龍の門衛右吉



谷熊の門衛右吉 “ 記軍嫩谷の一 ”

座 中 の 月 九



『一の谷嫩軍記』

時藏の相模

友右衛門の彌陀六

九月の中座

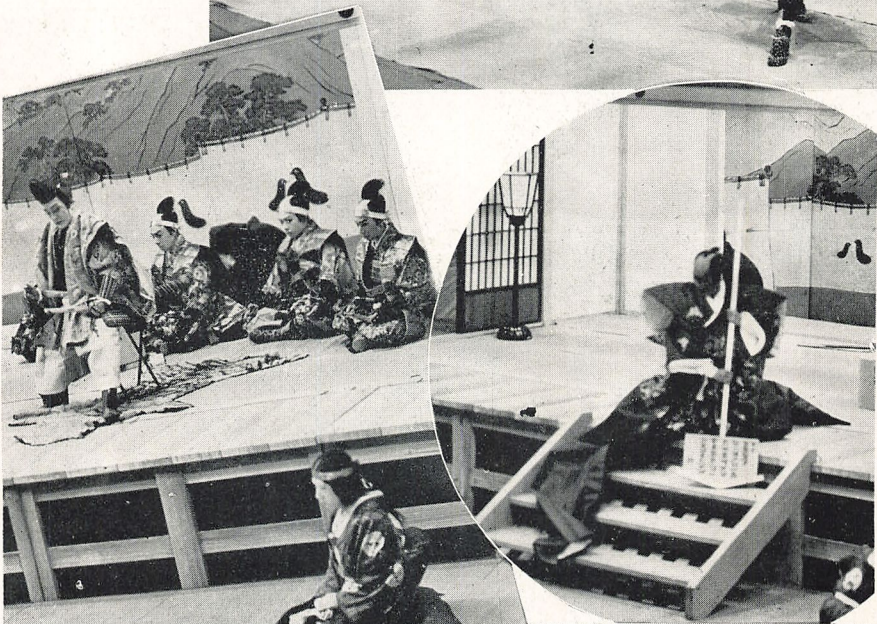
陣門の場



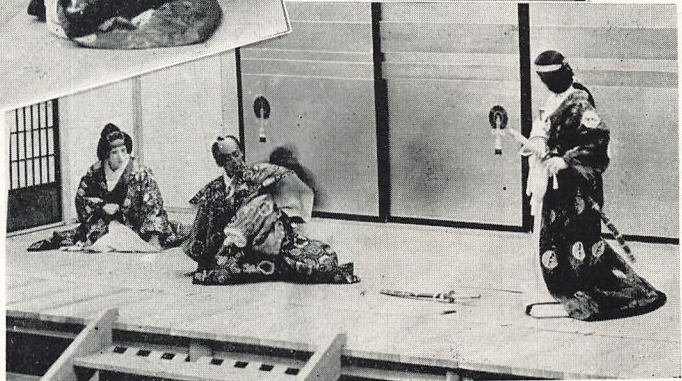
小次郎……宗十郎
熊谷……吉右衛門

陣屋の場

熊谷……吉右衛門

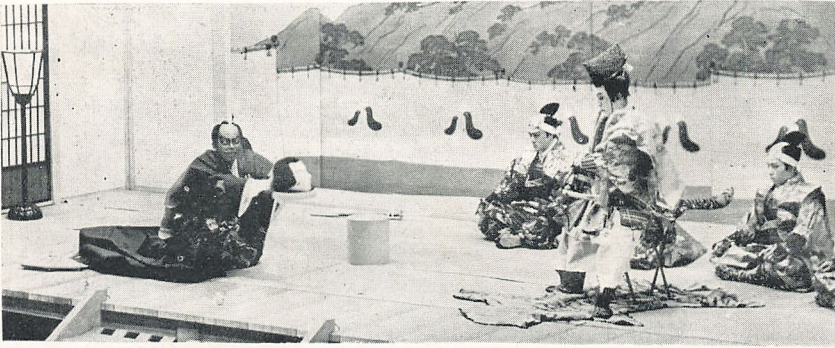


陣屋の場

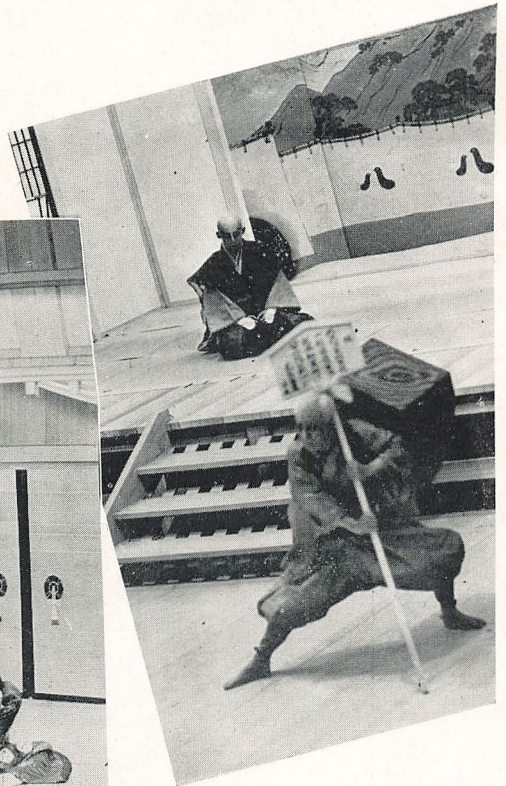


藤の方……田之助
熊谷……吉右衛門
相模……時藏

◇ フ ラ グ " 谷 の



門衛右吉……谷熊・郎十宗……經義 場の屋陣



藤の方……
田之助
義經……
宗十郎
彌陀六……
友右衛門
熊谷……
吉右衛門



陣屋の場

藤の方 田之助

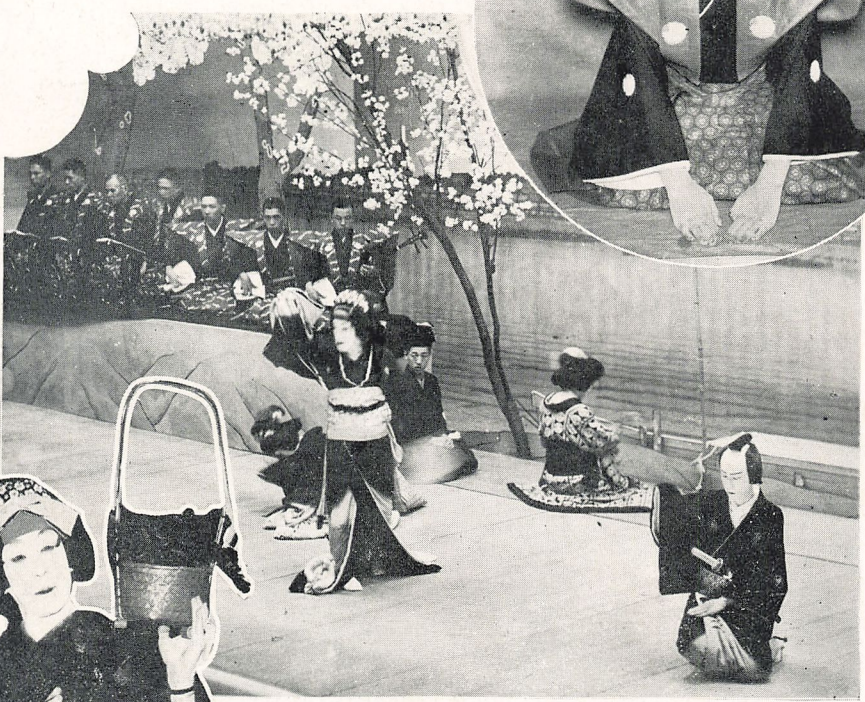
熊谷 吉右衛門
相模 時藏

“一の谷嫩軍記”

宗十郎の敦盛

九月あきづきの中座





宗十郎の野分姫の靈

“ 双面水照月 ”

吉田の若松	田之助
渡し守おしづ	時藏
野分姫の靈	宗十郎
娘おくみ	もしほ

九月の中座



“極附幡隨長兵衛”

幡隨院長兵衛 吉右衛門
 水野十郎左衛門 友右衛門

九月の中座

アングロス井ス

ミルクチョコレート

コーヒキヤラメル

チヨコレイト
キヤラメル

大阪市東區豊後町三番地

發賣元 株式會社 横山商店

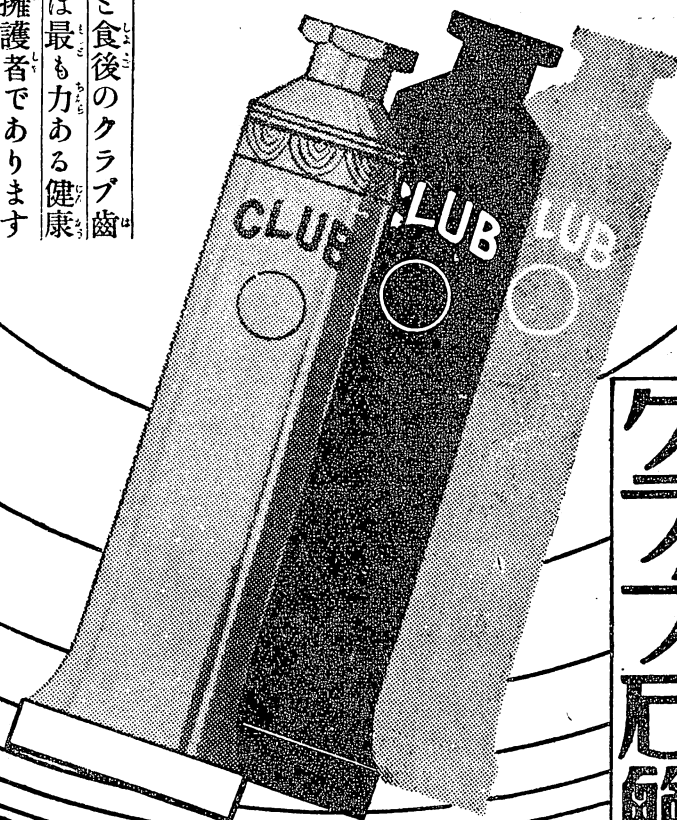
電話東(94)一六六一番



の 一 第 力 效

磨 齒 ブ ラ ク

朝と食後のクラブ歯
磨は最も力ある健康
の擁護者であります



最良の石鹼

ク ラ ブ 石 鹼

く直今は方のり困おに臭防の所便

製創氏郎太彪林 士學藥



(錢拾五金小瓶一定) (圓壹金大瓶一價)



△使用法 一回十滴乃至十數滴づゝ(場所により多少の加減を要す)一回多量に撒布するは却て効力を減ずる事あり使用後は栓を堅くし冷所に置かるべし。

到る處の薬店

各百貨店に販賣す

家庭必備品

使用簡潔
十滴奏効
無害無毒

「アポロ」ハ一つの便所に大抵十滴撒布すれば充分奏効します。

「アポロ」ハ溶かすことがありません、このまゝ撒布すれば宜敷いから少しも面倒でありません。

「アポロ」ハ他の薬(カンブラ油、デシン、ナフタリン、クレゾール、樟腦など)と異ひ化學的變化により放臭物を無臭とします。

「アポロ」ハ毒性がなく無害で便所にアポロの臭ひが残りぬ爲め汲取人がイヤがりません。無論農作物にも無害です。

「アポロ」ハ使用法が輕便で奏効的確、用量が僅かですから經濟にもなります。

元 寶 發

電話本局三三三番
電報大級三三三番
電話一七五番

光 榮 商 會

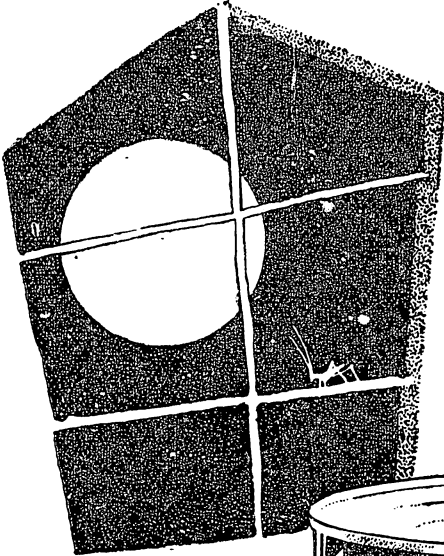
大 阪 市 東 區
伏 見 町 三 丁 目

しのびよる秋

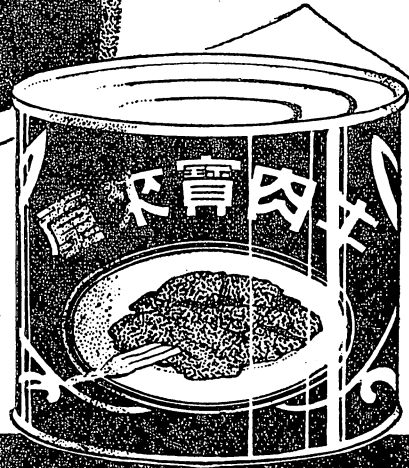
唆らるゝ味覺

食の世界に

牛肉寶來煮



全國到る處の食料品店にあり



店商下松 謹
橋麗高阪大
所張出都京店商下松
ル上統五井ヶ標部京

煮來寶肉牛

あらゆる印刷



永井日英堂印刷所

大阪市西區土佐堀通一丁目

大阪中央局私書函第壹八號

電話土佐堀 (44)

三〇八番
四九四番
四九四番
四九四番

振替大阪一九三九〇番

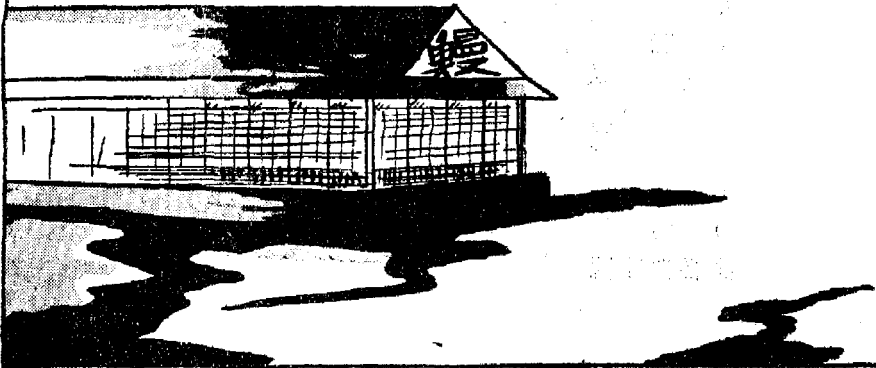
船生州

大阪名物



電話南

四八二〇
九五二
四八四四





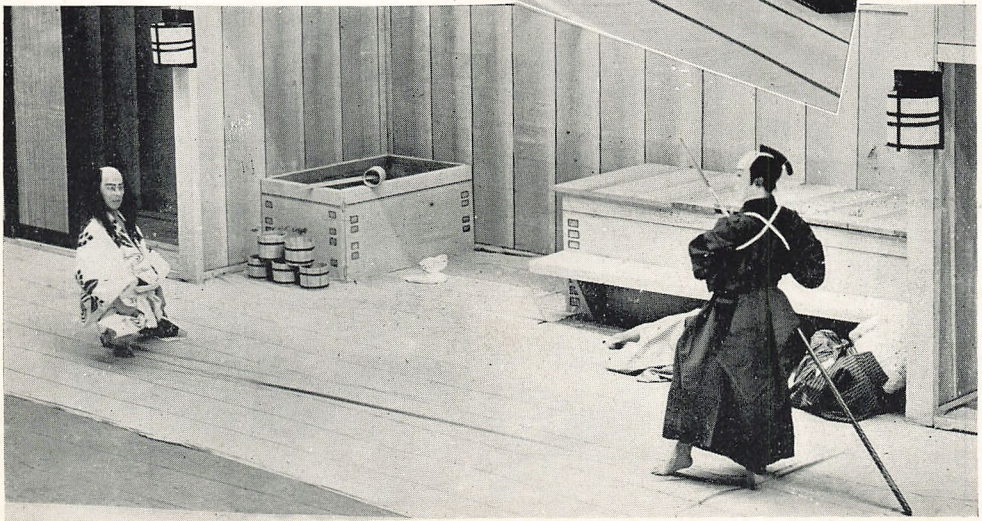
花川戸長兵衛内の場



八 彌宜町村山座の場
舞臺上面



水野邸湯殿の場



座中の月九 “衛兵長隨幡附極”

「結婚第二夜」

九月の浪花座



村田満智子の妻巴子、十次郎の竹原豊太郎
守住、菊子の雪子、小雛の友人山下良

「山芋が鰻に」

舞臺面

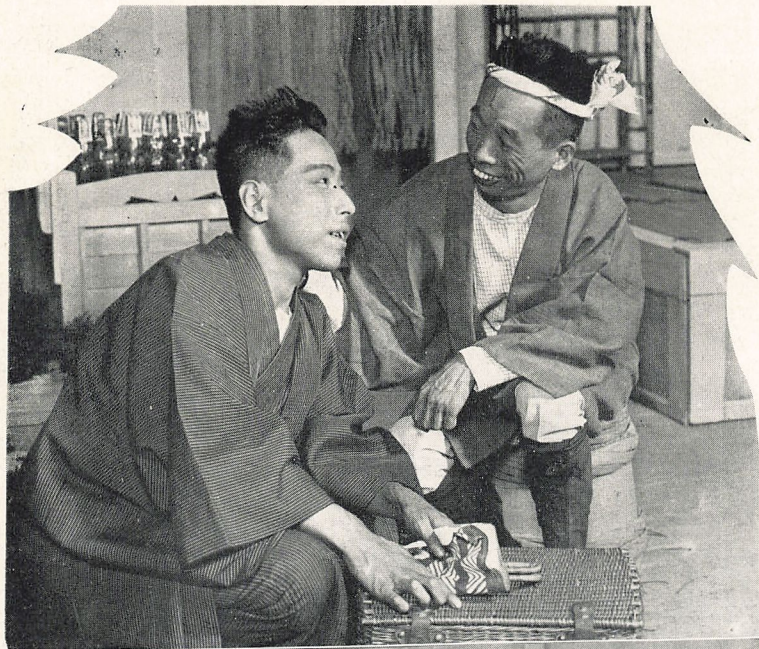
九月の浪花座



“嶺の出来事”

九月の浪花座

山 駕 源 太 …… 十 吾
同 條 吉 …… 天 外



“嶺の出来事”

九月の浪花座

茶店の主人 久保田京助
技 師 林 田 隆 三
娘 お く に

小 賀 川 清 織
東 愛 子





“巷説化鳥地獄”

熊谷要藏………山口俊雄
長州藩士
 鶴澤貞二郎………伊川八郎
 お妻………富士野葛枝

九月の角座

新興帝キネ映畫 辨天座進出

第一回公開記念番組

ごろつき船

原作 大佛次郎
監督 渡邊新太郎

オールスターキャスト

野獸群

原作 川口松太郎
監督 木村恵吾

主演 中野英治
高津慶子

劍劇レヴユウ

實演 第一回公演

明星 石 綠 郎

◇近日完成・封切◇

淀君

原作 三上於菟吉
監督 長尾史録

オールスターキャスト

腕風時代

原作 鈴木重吉
監督 田中貢太郎

主演 瀨良章太郎
高津慶子

赤い白鳥

原作 菊池寛
監督 印南弘

オールスターキャスト

「聖火」
改題 最後の女性

原作 岡田三郎
監督 松本英一

主演 歌川八重子
村上英勝

主演 香椎園子



紙取らぶあナキス

皆様の

おスキナ

道頓堀

スピード時代の

お化粧用

スキナ

あぶら取紙

(各化粧品薬店にあり)

元 造 製
屋 ナキス 田 中
阪 大

元 販 發
社 會 式 株 堂 日 朝
阪 大

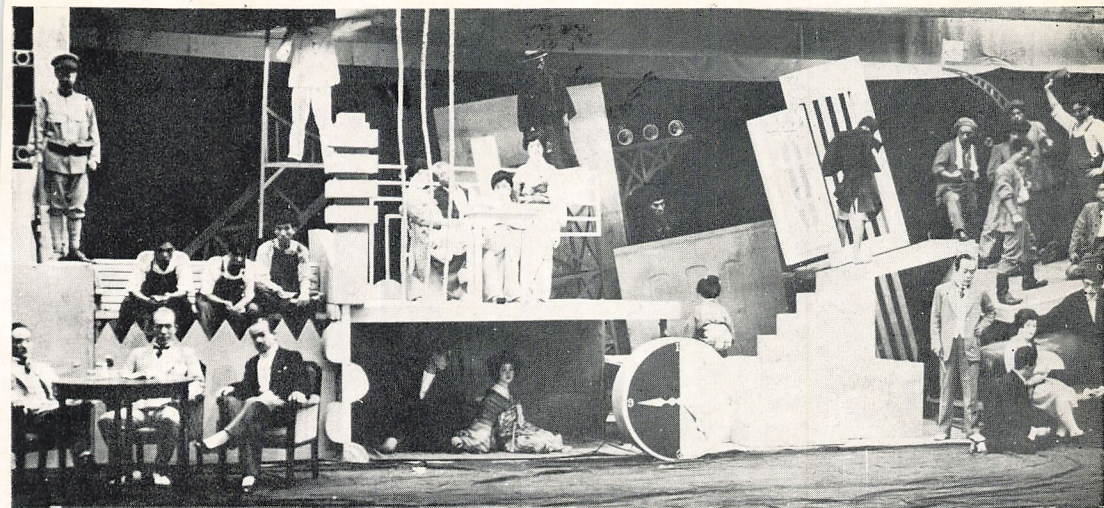


巷説
化鳥地獄

九月の角座



長州浪人
 押切の猪太郎……辻野良一
 太田黒 貢……中田正造



誘惑時代

第一景舞臺面

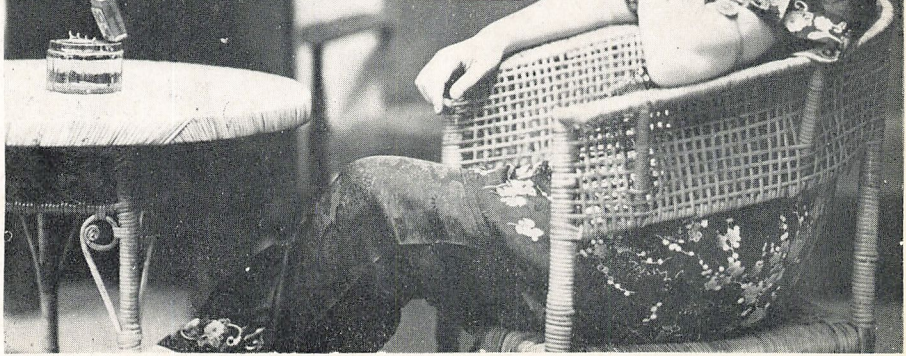
ダンサー みさを

和歌浦糸子



化鳥地獄

舞臺面



“ 派一樂貞の月九地天樂 ”



“ 飛び込んだモガ ”

舞臺面



面臺舞 “ 縞らくめ ”

面臺舞 “ 情の夜一 ”





“ 八陣守護城 ”

浪花入江の段舞臺面

九月文樂座

秋 趣

高級割烹

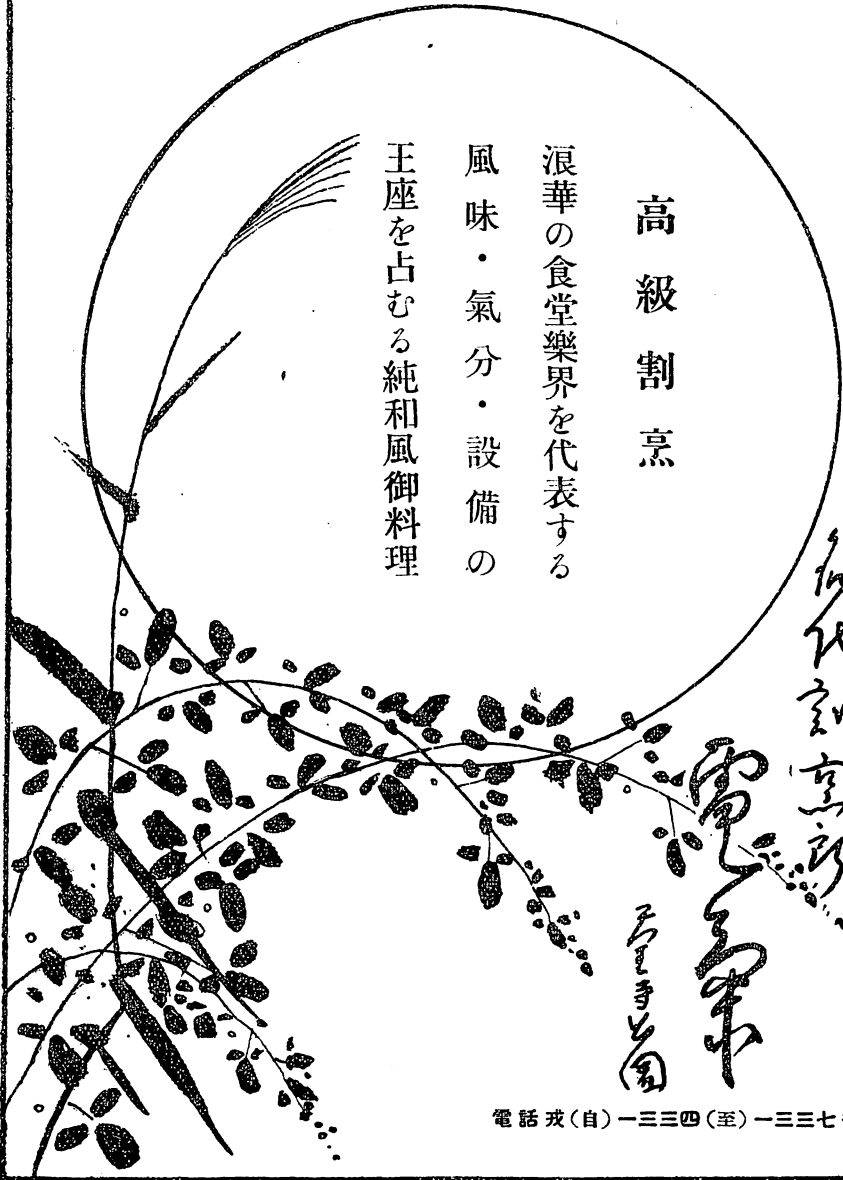
浪華の食堂樂界を代表する
風味・氣分・設備の
王座を占むる純和風御料理

高級割烹

浪華

東京

電話 戎(自)一三三四(至)一三三七番



劇廣宣圖裝
畫昔傳案飾



阿久田號

神戶市水通三丁目六一
電話二〇四二(五)

開 公



日 近

○明星 石哲 六潮 監督	○堀野 正英 治夫 監督	渡邊 哲二 監督	服部 靜夫 監督	○高石 浩一 吉盛 監督	○月形 龍之介 監督	○阪東 壽三 監督	○林上 金太郎 監督
『平 手 造 酒』	『浪 人 晴 れ』	『小 猿 七 之 助』	『御 家 人 ば や り』	『若 様 奉 行』	『は し ご 道 中』	『勝 關』	『か た わ 雛』

.....品作特超所影撮泰大
 演共子靜森・助之壽東阪・郎三德嵐
 坊一天こ守前越岡大
 郎五瀬廣 督監・作原福六田額
 清岡片影撮

社 會 式 株 マ ネ キ 竹 松

大阪市東區農人橋二丁目十二番地

合名
會社

大阪橋本組

電話 東

特長
特長
一一五八〇番
一五八〇番
五八〇番
五八〇番

支店 東京市麴町區丸ノ内二丁目六番地

電話丸ノ内特長四七八〇・四七八一番

支店 小倉市大阪町十丁目（電話四三〇）



“ 引 窓 ” 舞 臺 面



新 口 村 舞 臺 面



“ 八 陣 ”

主 計 之 助 早 打 の 段

“ 壺 坂 ” の お 里



東西合同大歌舞伎
九月巡業陣



歌舞伎十八番
"勸進帳"

雁治郎の富樫左衛門
幸四郎の武藏坊辨慶

東西合同大歌舞伎
九月巡業陣

“封印切”

鷹治郎の忠兵衛



“んせお屋樽”

んせおの助福・助伊の車魁





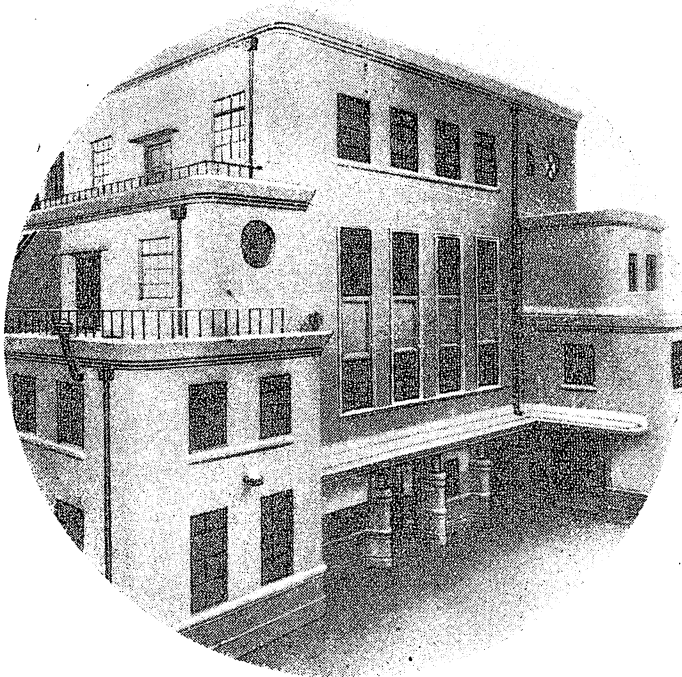
“ 女
郎
蜘蛛 ”

壽三郎の田烏町の龜吉
石河の白魚のお絹

京南座の九月
第一劇場

松竹ビルディング

各座の備品倉庫・用度倉庫	地階
ビブル入口・大道具製作部	一階
文樂の倉庫・電氣部	二階
衣裳部・小裂部	三階
ガクゲキ部・練習所	四階



松竹衣裳部

電話 戎五六三四番

颯 爽 た る

秋の御容姿を

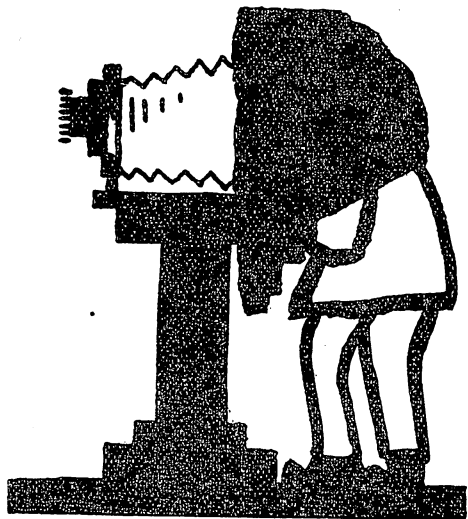
まづ優秀の技術を誇る

當館で御撮影下さい

高津郵便局東

山崎寫眞館

電話南四二四四番



雜誌·究研劇演·刊月

九月號

演藝

第五年

輯八十四第



無官太天教盛
山手子郎

昭和五年九月
揚子左白



熊谷初郎直官
去右正門



吉右衛門と熊谷

落合浪雄

うろ覚えのエピソードの一

吉右衛門の母堂、即ち先代の時藏夫人、その人を僕は知らないが、芝居の分る見功者でそして通の人であつた事は、この話でも伺はれる。その話は丁度熊谷を初役で吉右衛門が演つた時ではなかつたらうか、眞偽不可證、また聞きのうちうろ覚えであるが、そんな事より話が面白いから茲に記す。

「芝居には一幕もしくは一場の裡にも必ず山もあり谷もあり河もあるものだ。それで面白味も味も出て来るのだ。ところが辰（吉右衛門の名）の熊谷には山も谷もない。作者の視つた山も谷も、それは勿論あるのだが、俳優としては、その山や谷を更らに深めもし、高くもして行かなくてはならない。辰の熊谷に山も谷もないといつたのはいひ方がわるかつた。

山はある、が谷がない、ではない。芝居が初まるとすぐ山に登つて仕舞つて、何處まで往つても山ばかり、谷が無くなつて仕舞ふから、骨を折つて山へ登つたのが、平地を歩いて居る様で面白くない。

うろ覚えのエピソードの二

鴈治郎が若い時、といふと随分昔だと見える。是も聞きかざりだから無論、責任のない話だ。その鴈治郎が九代目團十郎の熊谷で敦盛をやつた事があるそうだ。二三年前に大阪で中車の熊谷で同じ役を鴈治郎のしたのを見た。あの年ではないにも御年十六の荒武者になれる鴈治郎の事、九代目を相手の敦盛が美しくも荒々しくも、そして無邪氣らしくもあつた事は想像に難くはないだらう。いろいろあつて敦盛が鬚を咬

えて合掌する。熊谷はうしろに立身で居る。目を瞑つて合掌して、そして待つが、いつまで待つてもどうもならない。團十郎がどうかしたかと、芝居ではなく本當にそつと敦盛が熊谷の方を覗き込む。それと熊谷の眼がハツと合ふ。熊谷が氣を取り直して大刀を振りかぶる。といつた事があつたそうです。何だか鷹治郎の敦盛を思ひ團十郎の熊谷を想像させるに足る好い話ではありませんか、それが假にうその話だとしても。それでこの原稿のはじめにこの話も一寸記した譯です。

(一)

吉右衛門の熊谷は天下の一品である。といふのは随分前からの話である。が事實彼はこの永い間、熊谷役者としての第一人者である位置を巍然として立派にやり通して來たのである。

中車は論じまい。幸四郎のは形に於いていろいろの良さもあるだらうが、氣魄に於て吉右衛門に及ばない。外に誰が居る、誰もありはしない。左團次は新しい綺堂物を型物にて仕舞ふ人だから、或はうまくやるかも知れない。けれども彼が型物にし歌舞伎式なやり方をして、見物は彼を新しい役者だと思つて居るから、やるまい、又やれもしまい。菊五郎は世話物といふより、リアリズムの芝居が得意でもありするので、純歌舞伎からは次第に遠ざかつて行くから敵とするに當らない。だから吉右衛門の熊谷などは、今もこれからもそして永久に天下一

品を看板にする事が出来る譯である。對抗する者も追従する者もないからだ。

(二)

吉右衛門の熊谷が氣魄に於て幸四郎を凌駕するといつた。それらの氣魄が、母堂のいふ處の山登りである、山へ登つたら下りる事がどうもいやなのだらう。熱があるといふ、それが出すつばりの熱なのではないか。

メリハリ、抑揚、これは單にセリフの調子だけの事ではあるまい。この芝居の熱といふか、又は氣魄。簡單にいへば氣持こそ最も必要なものではなからうか。氣持の表現にメリハリが出て來てこそ。氣魄も熱も力ある表現となるのだと思ふ。緊張しきつた氣持では、いひ變へれば上りきつた熱では、敦盛がどうしたのだらうかと顔を振り上げて熊谷を覗き見る餘裕はない筈だから。

(三)

無表情な人形から出た歌舞伎、洗練された形と、それに伴ふ言葉、として氣持を説明する文句(淨瑠璃)の、私にはせればクラシックな純歌舞伎に表情や、氣魄や、熱は不必要なものなのだ。赤い面、白い面、隈取り、それが表情なのだからそれ以外のものはなくても出来る筈なので、それに熱や氣魄が加は

れば大層しつこいものになる筈だが、幸にも間のびのしたテムボの緩い歌舞伎をその儘に演じるのだから俳優の表情や氣魄でやつと維持して行かれるのだ。

團十郎は寫實派な新人であつたらう。それで歌舞伎が復活したのだ。

團十郎から受繼いだ寫眞派である若い俳優の二人が、その傳統を分けて世話物と時代物の二つに、菊五郎と吉右衛門がそれ〴〵に覇をなした所以である。

(四)

寫實は演劇の重大な要素である。とはいへそれはブリミチブな、それでも忘れる事の出来ない要素である。

完成された能は歌舞伎以前のものです、より狭い範圍で弄ばれた演劇である。洗練された技巧が完璧をなして居る。それなのに梅若實(先の六郎、たしか)などは今日知らないが、活歴風に思ひ入れたの、なにか顔の表情をして居るのを、「安宅」で彼の辨慶で見た。これは十分異端である。その代り一寸大衆が面白がつた。

併し本格的には邪道であつた。それを咎めて居る間に「能」は貴族連のおもちやになり了した。

吉右衛門の熱や氣魄で、やつと吾等は熊谷を面白く思ふ。吉右衛門の力で歌舞伎が今の世に残される値をねうちつけられて

る、と斯いつても無理ではあるまい。この熊谷をやつて山や谷をといふのは無理な注文である、もし、今日鴈治郎の敦盛が熊谷どうしたと振り向く様な團十郎の熊谷は誰も感心しないであらう。

(五)

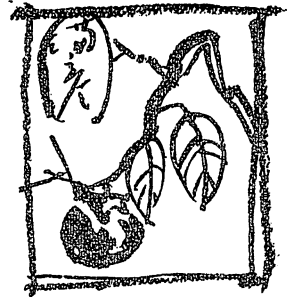
私は歌舞伎が「能」の轍を踏んで、尊重す可き藝術として忘れられて行くものと思ふ。そしてそれが遠い未來ではないと思ふ。

この時に敢然と吉右衛門がこのクラシックで大衆を唸らせる事は豪いと思ふ。

が、吉右衛門自身としても二番目の長兵衛をやつての心持はどうであらう。樂でさりりとして、胸がすいて、客の方もそうではないか。

結構でしたの熊谷より、面白かつた長兵衛の方がいくらか時代に即して居る。人間味がある。

私の願ふ處は吉右衛門として己に名を成したクラシックの第一人者であるばかりでなく、も一つ世話物の方へ流頭して見るか。更に新しい道を拓いて行くのはどうかといふにある。



吉右衛門の熊谷

鬼 太 郎

吉右衛門が一の谷に熊谷を出すさうですが、顔に見だてのな
い優ですから、見た日本位で言はれたら、餘り好評ではありま
すまい。

東京だつて、あの目隈の濃い、道具の小さい顔を、無理に立
派だといふ人はありません。

然し、此の優は、御承知の通り、若いに似合はずデンく物
に巧いので、臺詞や形の廉々が、一ツツポにはまつてキチンと
してゐます。

特に臺詞と來ては、東京俳優中稀有の巧者で、言葉の中に心
を盛る事の巧みな點は、確に此の熊谷の役にもよく現れます。
そこで、陣屋の方よりは、悲痛の氣分の切なる組打の場の方が
ヨリ多く何時も好評です。私なども事實さうだと思つて居りま
す。

陣屋は誰の型でやりますか知りませんが、組打は無論九代目
流で行くのだらうと思ひます。淨瑠璃では、陣屋と組打とは
其の重みに於いて一寸一緒になりませんが、生きた役者、此の
東京の臺詞の巧い役者がやると、須磨の浦の後半は、實に大し
た見ものです。

最良の料簡になつていへば、何卒組打の方を大事に見てやつ
て戴きたい。

顔形の立派な熊谷の、三段目の仕事ばかりを、一の谷での見
どころのやうに思つてかゝられては、吉右衛門の此の役は、半
分以上も損をするでせう。

中村吉右衛門の熊谷に就いて——私はもうこれ以上、何も言
ふ事はありません、これが全部です。



熊谷の回想と期待

入江 來 布

吉右衛門丈が来て、一の谷の熊谷をするとき、圖らず七年前のことを回想し、その幻影から今度の期待へと思ひを移して見た。

此の前に、丈の熊谷を見たのは關東大震災の翌の春、大正十三年の一月狂言、京都の南座に於てであつた、その時の配役は、

無官大夫敦盛	三津五郎	軍次	扇雀
小次郎	同	平山武者所	吉之丞
藤の方	紅若	梶原景時	七三郎
玉織姫	時藏	彌陀六實は宗清	市藏
妻相模	同	熊谷直實	吉右衛門

斯ういふ役割であつた、今度はどういふ配役か、この内誰れと誰れとが出てゐるのか、同じ役の人は誰れであらうか、その移り變りを比べるもまた興趣の一つである。

あの時、一緒に見た友人たちの間に問題となつたのは須磨の

浦の場で敦盛が小次郎かの關係があまりに曖昧勝手として——といふよりは確かに見物を諷りすぎてゐて、そのために陣屋の場との楔が薄くなる、それを吉右衛門丈が内面的な演出で救う／＼としてゐた、その力は確かに認めるが、脚色の缺陷は如何ともし難いといふ點であつた、なるほど淨瑠璃本を讀んで見ても全く巧みに隠しきつてゐる、これをそのまゝ隠し切つて演出するのも一つの方法、所謂肚藝でそこを句はせ敏感な見物にちらりと予感を與へるのも一つの方法、私一流の二元肯定説でいふとどちらの方法をとつても役者の藝力次第でどちらとも成り立ち得る、當時の吉右衛門丈は後者の表現をとつたやうに思ふが、今度はどういふ型でゆくか、またそれがどういふ風に見物の眼にうつるか、それは期待される樂みの主なる一つである

吉右衛門丈は型の役者で、さうして肚の役者である、換言すると外形的の演出であると共に内面的の解釋を忘れない役者である、この特長は、一の谷の熊谷のやうな歌舞伎にして而も内

面に複雑繊細な情感の流れてゐる役柄、舞臺面に最も適切である、繪で言へば太い線で、繊巧な含蓄を現はす行き方である、と當時から丈に諒解をもつ人々は禮讚を惜まなかつたが、併し一般的には、當時なほ丈の演出は、著るしく型の表現者といふ部類に觀られてゐた、少くも七三乃至八二の割合に型に傾く演出として見られた、私は古名優の型を一々知らないけれども、實際に於て丈は大部分團十郎等先輩のよい型を套襲して居たといふ事であつた、併し、丈のやうな内面考察をもつてゐる人はいつまでも古人の型の繰返しでは終始しまし、最後には更に或る型の固定に復歸するとしても、一旦は、その藝力の旺中する盛時に於て、きつと型を基礎として而もその型を踏み出す獨創——自由が現はれて來ねばならない、當時、私は將來にそのことを期待した、七年後の今度の演出、きつとそれは刮目すべき何かの現はれがあるに違ひない、たゞに當時の型の繰返しに了るやうな筈は決してない、私は、見巧者でもなく、通人でもないから七年前の型を、こゝはどうした、あすこはどうきまつたと一々覺えて居ない、一々覺えて居ないのみならず、全體としても當時の幻影は可なりにおほろけなものである、けれども、今度の演出に於て、如何の程度に丈が獨創を發揮するかはその舞臺を見さへすれば、別段に、一々七年前の記録と對照せなくとも、確かに味得出來るべき筈である、そこが藝の味ひであり、がた藝を味はふ功德でもある。この功德の如何を試すこと、こ

れもまた今度の芝居の樂しき期待の一つである。丈に於てこの型を基礎とし、而も型を脱して獨創を現はすといふ點はどういふ所にあるかといふと、それは恐らく古人の型のうちの無駄、若くは不合理を除去して、藝術的有意義の點を強調する、謂はゞ古人の型を丈の藝力で醇化するといふ點に目標があると思ふが如何。部分的に言へば、須磨の浦で「かちどき」の條りはどんな気分が出るであらう、壇特山はどう演ぜらる、であらう、豪岩と悲嘆との錯綜は？、それから陣屋の場での「制札」の始めから「物語り」、法體への氣の變り、引込み、さういふところの演出それを受身のこつちの感受がどうだらうかと、斯う書いてゐるうちに期待はいよいよ具象的になつて來る。その他の役々から、舞臺裝置、總體的の演出に就ても、期待がそれからそれへと移つて來た、平山の武者所、この演出もうまくやつたら面白い役であるが、手持無沙汰になつたら全面の感興を減殺して了ふ、型通りでゆゑか、試みに型を動かすか、これも興味の一つ、須磨の浦の場の舞臺裝置、寫實に傾いて、石や木の根などごろ／＼と置かぬやう、花道の武者所の立ち場所、それから遠見の船を思ひ切つて割愛する勇氣の有無、陣屋の場「入相の鐘は無常の時を打つ、陣屋／＼の灯し火に」の一轉機に、ある時間を持たせて舞臺の空虚を味はせ、巧妙な照明力を併用する等の試みなどはどうであらう、たゞ徒らの空想か。歌舞伎第三復興の機運に、吉右衛門丈の來阪決して意義なき事ではない。



一の谷嫩軍記 (鴨嶋石)

— 中座九月興行 —

熊谷 斯御運の極まるうへは御名を名乗り直實が高名譽を
 なし給へ、今生の何事にても思ひ残す事あらばかならず
 たつし参らせん。

念頭に申すにぞ敦盛御聲さわやかに

敦盛 ヲ、やさしき志敵軍らも遠れの勇士斯く情ある武
 士の手にかゝり死せん事生前の面目我戦場に越くより家
 を忘れ身を忘れ兼て無身と知る故に思ひ置く事さらく
 なし忘れがたきは父母の御恩我討死と聞給はゞさぞ御な
 げき思ひやるせめて心をなぐさむ爲討たれし所にて我死
 骸かならず父へ送り給はれかし。

ト云りつき合せ座を占めて

我こそ参議経盛の末子無官の太夫敦盛なり

名乗り給ひしいたはしき木石ならぬ熊谷も見る目涙
 にくれけるが何思ひけん引起し鏡のちりを打拂

ひく

敦盛をよろしくいたわりて

熊谷 扱こそ参議経盛の御公達にておはするよな此君一
 人助けしとて勝軍さが負にもなるまいし折ふしあたりに
 人もなし沖にかゝりし御座船はなぎさも八反はよも過ぎ

まじあまりに御いたわしき程に一先づ爰を落
 ち給へ早う。

早うとすめ申せば敦盛公

敦盛 逆も退きぬ平家の運命爰を助かり行先に
 下素下郎の手にかゝり死取をさらさんより

早く御身が手をかけて人の疑ひ暗らされよ。

西に向つて手を合せ御目を閉ぢて待給へ

ば、いたわしながら熊谷御後に立廻り彌陀の

利劍と心に唱名振上は上げ乍ら玉のやうなる

御粧ひ情なやむざんやと胸も張さく氣も臆れ

太刀振あげし手も弱り思ひに亂れ討兼てなげ

きに時もうつるにぞ向ふの山より平山が。

熊谷切兼る思入

此時向ふの岩の間より平山半身出

かゝり

平家 ヤア、熊谷平家方の大将を組敷きなが
 ら助けるは二タ心と極まつたり熊谷ぐるめ討

つて取れ。

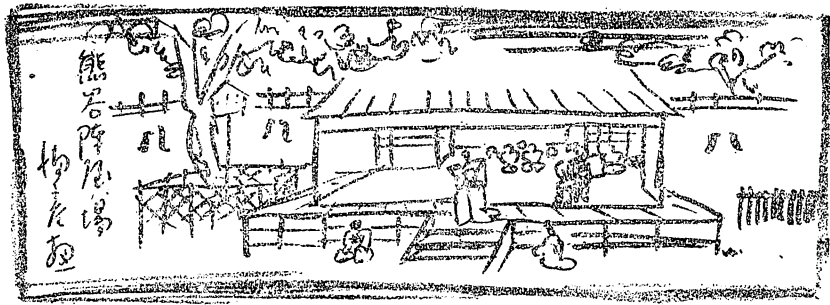
熊谷はハツと許りいかゞわせんともくね

んたり

敦盛 ヤア臆れしか熊谷汝がなげきに時うつり
 皆の汚名を取らるか早々首を刎ねられよ。

ねじむき給ふ御顔を見るに目もくれ心消

熊谷 某に倅小次郎と申す者丁度君の年格好



今朝の合戦に手きづ少々負たる故陣所にのこし置たるさへ心にかゝるは親子の中夫を思へば今爰で討奉らば嘸や御父經盛公の御たげきを思ひ過ごされ今更に。

「さしもたげき武士のそごる涙にくれ居たる

敦盛 ヤアリや直實悪人の友を捨て善人の敵を援けたは此事早首うつてなき跡の回向を頼む左なくば此場で生害せうか。

熊谷 ア、早まり給ふな。

敦盛 ひきやろの汚名をとらするか。

熊谷 サアそれは。

敦盛 但し首を討たるゝか。

熊谷 サア。

敦盛 サア。

兩人 サア〜。

敦盛 はや〜首を刎られよ。

熊谷 ハ、ツ。

「是非なしと立上り

熊谷敦盛の後ろへ廻り太刀を振あげ順縁逆縁諸共に菩提未來は必ず一蓮托生。南無阿彌陀佛〜。

熊谷 ヲ、サ小次郎が手柄といふハ平山の武者でもいたしたら大ていうれしい事でごさんせう。所と争ひ抜けがけの高名軍門に入つての働き手瘡少々負

ふたれども末代迄家の譽。相摸 シテその手瘡は急所ではござりませぬか。

熊谷 コリヤ〜今申た口もかわかぬ内手瘡を案じ其顔付モ急所なら何とする。

相摸 サア急所なら猶よからふと存じます。

熊谷 ナニを。

相摸 イエ何のいなアかすり瘡でも負ふ程な働きは出かしたと嬉しさのあまりお尋ね申しました但其時あなたも小次郎と一ツ所にお出なされましたか。

熊谷 ヲ、サあやうしと見るよりも軍門に這入り小次郎を小わきにひんだき我陣家へ連れかへり養生のくとへ我は又其日の軍に搦手の大物無官の太夫敦盛の首討つて此類なき高名手柄をあらわしたわへ。

相摸 スリヤアノエ……

「咄しに扱はと驚く相摸後に開居る御臺所

摸模柄り思入此以前より藤の方後

に伺ひ居て此時懐劍をぬき。

藤の方 我子の敵熊谷かくご。

「熊谷覺悟と突きかゝるをしつかと押へ。

突いてかゝるを扇にて懐劍を打落し藤の方を引つける

熊谷 ヤア敵呼は〜り何やつなるぞ

引寄せるを女房取つき
ア、モシりやうじなされな、あなたは藤
のお局さま。

熊谷 ナニ藤のお局とな。
引起し顔を見て胸り思入

ヤア誠に藤の御方思ひがけなき御對面にて。
飛退敬ひ奉れば

思入あつて熊谷藤の方の手を持上
座に直し平伏する

藤の方 コリヤ熊谷いかに軍の習ひじやとて年
端も行かぬ若武者をよふむごたらしう首うつ

たなサア相撲約束じや助太刀して夫を打たし
や。

相撲 サアそれは。

藤の方 最前いゝしは偽りか。

相撲 そふではなけれど。

藤の方 そんなら打たしや。

相撲 サア。

藤の方 サア、何んと。

相撲 ア、い。返事も胸にせまり
コレ直實どの教盛さまは院のお崩と知りなが

らどふ心得て討たしやんしたよふすが有らふ
その譯を。

熊谷 ヤア思か、此度の戦ひ敵と目さず御
方と夫と随ふ平家の一門教盛は執置、誰かれ

と鎧をけづるに用捨がなるふか。イヤなに藤
の御方戰場の義は是非なしと御諦め下さるべ

し其内に軍のあらましと教盛公を打たる次第
物語らんと座を構へ

扱も古ぬる六日の夜早東雲と明る頃一二を争
び抜きがけの平山熊谷打取れと切つて出たる

平家の軍勢中に一ト際。
勝れし緋緘

さしもの平山あしらひかね。

演邊をさして逃出す
ハテけなげなる若武者や逃る敵に目なかけず

熊谷是に控へたり返せ戻せヲ、イ、

扇を持つて打招けば駒の頭を立直し波の
打物二打三打いざや組まんと馬よりむん

ずと組兩馬より合にとふと落。

藤の方 シテその若武者組敷てか。

熊谷 されば御顔つく、と見奉れば黒く
と初眉に年はいざよふ我子の年はい寄つて二
夕親ましまさんその嘆きはいか計りと子を持
ちたる身のあまり上帯とつて引起し。

ちり打拂ひ
ア、早落ちたまへと。

相撲 進めさしやんしたか、そんなら打奉る
お心ではなかつたかいナ。

熊谷 サア落ち給へと進むれど一旦敵に組敷か
れ何面目にながらへん早首取れ熊谷と。

藤の方 ナニ首取れといやつたかア、けなげな
事をいやつたな。

熊谷 サア其仰にいと猶涙は胸にせきあへず
まつ此遠り我通り我子の小次郎敵に組まれて

命やすてん達間敷は武士の習ひと太刀も。
扱き兼ねしに逃去つたる平山が後の山よ
り聲高く。

熊谷こそあつ盛を組敷ながら助けるは二夕心
に極まりしと。

呼はる聲く
エ、是非もなや仰置かるゝ事あらば云ひ傳

て参らせんと申上れば。

御涙を浮べ給ひ

父は波濤へ越給ひ心にかゝるは母人の御事
時ふに替はる雲井の空定めなき世の中をいか

たゞ遂行給ふらん未來の迷ひは一トツ熊谷た
のむの御一ト言是非に及ばず御首を、討奉
つてござりまする。



双 面 漫 考

高
谷
伸

女も口説けば泥棒もやる人殺しまでする破戒無類な悪僧でありながら、人を呪ふに穴一つ終には自ら墜ちこんだり、自分の艶書を読みあけられてヘーイと答へる法界坊、なんとナンセンにできた、うれしい坊主ではないか。

悪僧の怨念と、美女の執念との使ひわけ、なんとグロ満點の光景ではないか。

吉田の松若を中心に二人の美女の戀愛鬭争、この場面をエロと見る。このエロ・グロ・ナンセン三拍子揃つた法界坊を誰が、おもしろくないといふ――

ところで、こんどは、双面の所作だけである。法界坊の靈の凄艶は窺はれやうが、あのウレシイ坊さんのオモロサの無いのは幽霊になるだけ「うらめしい」

双面の淫蕩は、二人静などであらう。謡曲ばかりでなく、本物と偽物との鉢合せは千本櫻の忠信にもあるし、二人浅間の趣向にもなつてゐる。支那を旅した時、杭州のうすぎたない場劇

で熱いタオルを手にしながら見た、眞假安郎といふ芝居もこの手だつた。

坊主殺せば七代崇るか如何かは知らないが、僧侶の怨念の現れである美女との「ふたおもて」は、近松の「赤染衛門榮華物語」が最初であらう。寶永六年十月の豊竹座で上演されたもので、平等院の僧大信が赤染衛門に戀をするが、大江匠衛のため欺かれて溺死する。榮華物語ができて赤染衛門が獻上に參内すると、大信の亡霊が同じ姿で現はれ、同じ所作をするといふ趣向である。

その次が清玄である。これには曾我が絡んで「日本塘鷄音會我」といふ名題がついてゐる。歌舞伎年代記寶曆七年の降に、春、中村座、物ぐさ太郎本名悪七兵衛景清團十郎、清水寺の清玄半五郎、櫻姫嵐富之助に、無韻の戀慕して指を嚙切、破戒の僧と成し故刺殺し姫を助る場大でき（中略）ハツ橋が亡魂富十郎、清玄が亡魂女姿團十郎。火鉢の中より兩方同

じ出たち(二人浅間)淨瑠璃文字大夫にて、そがの十郎七三所作事同じく、團十郎清立の骸こつ大當り(中略)この春の評判より極上吉市川團十郎となる。

とある。この極上吉市川は白字ではあるが出世狂言であつたことは確かである。作者は堀越二三次、常盤津の名題は「妹春塚松櫻」であつた。

ついでに寶曆十二年二月の中村座では坊主でなくて、娘白菊が傀儡師六兵衛に乗り移る「垣衣草千鳥紋目」が演ぜられた。これが慈賣のはじめで金井三笑の作やはり常盤津である。

法界坊の名の顯れたのは、明和二年一月市村座の「色上戸三組曾我」の中の「江戸名所都鳥追」だがこの羽左衛門の役は五郎や照天の前などにあしらはれた軽い常盤津の淨瑠璃にすぎなかつたのである。

このやうに曾我狂言のあしらひとして用ひられ、明和二年には「天津風念力曾我」の二番目「双面花入相」の名題で現今の筋に近い双面ができたが、法界坊は真砂の庄司の亡魂でお花半七に絡むことになつてゐる。

しかし、その基礎の確立したのは安永四年の二月市村座上演の中村仲藏の大目坊で「色模様青柳曾我」の淨瑠璃で名題は「垣衣戀寫繪」で詞章は初代河竹新七、太夫は常盤津兼太夫であつたが、全體の作者は櫻田治助である。大目坊が景清の伯父といふ所で源平時代に絡んでゐるが、大體は現在の法界坊で、た

だ、滑稽味より惡黨味の方が多かつたと思はれるばかりである。これに刺戟されて、四代目市川團藏が奈何七五三助と提携して「隅田川續佛」の法界坊を作りあげた。それは天明四年三月七日初日の角の芝居のことであるが、これが大當りで五月まで打越したばかりでなく、天明八年の二の替りに上演するために中村仲藏を迎へて、天明七年十二月廿六日より角の芝居で、「鶏鳴吾妻世話事」の大切に「垣衣懸寫繪」の上りり、大目坊でない法界坊をやらせたが、仲藏が發病し、有馬へ湯治に行きついで江戸へ歸つたので、狂言を搦きかへねばならなくなつた。

同じ歳に江戸でも森田座で、「雛形雅曾我」で、勸彌の大目坊の大切に「しのぶ賣」があつた。これも曾我にお花半七の絡む

だもので、淨瑠璃は兼太夫であつた。團藏は、寛政十三年の九月中村座で、源平布引瀧の二番目に「振袖隅田川」を出してゐる。役名は「法界坊後ゆうこんしのぶ賣」である。さういふ次第で上演ごとに漸次改訂されて現今の「隅田川續佛」なり「双面月姿繪」なりができて上つたが、以上の外に、まだ土手の道哲だの快了だの願鐵だの、名で、都鳥名所渡、垂帽子不器用娘、隅田堤、戀、齋、蹴、容、顔、花、競などの名題に現れてゐるが、要するに、法界坊なり、双面なりの淨瑠璃は、中村仲藏から四世團藏に至つて完成され、安永の大目坊から天明の法界坊で大成されたのである。作曲も常盤

津兼太夫弦古式部によつて今日の基礎を作つたのである。名題も今度のやうに「双而水照月」を用ひることが近頃多いが、普通は「双面月姿繪」である。

地も原則として常盤津であるが義太夫とは掛合のこともあり清元で出したこともある。富本の流行時代には富本でも出たし豊後系の淨瑠璃には各派ともそれぞれ双面の曲がある。また大阪では長唄と江戸淨瑠璃との境界が明治もかなり末まではつきりしなかつたので、たゞ長うと連中で片付けられてゐた事もあつた。

舞臺一面櫻の釣枝、向ふ晴れやかな川の背景、青間には造り物の舟が纒つてある。下座の囃子浪の音で幕があく、置淨瑠璃になる女船頭が出る。

戀には身をもやつせといふた……といふ松若とお組の出である。太鼓入、笛にあたり鐘といふ華やかな踊がある。川千鳥のきまりなど、そのまゝの書になつてゐる。

白浪の雲かあらぬか煩惱の……竹本の淨瑠璃で懷味を聞かせ、法界坊と野分姫の怨念を一身にひきうけた慈寛りがせり上る。ちらと舞臺へ思入れがあつて、また以前の賑やかな囃子になり、面白い振りになる。

しのぶの亂れから法界坊と野分姫の仕分けで、曲も振りも技巧の妙を盡くしたものである。故人常盤津林中が得意の一つとしてゐたのもこの面白さである。

三下りの尾花招けばや、評判のクドキから、所作としての双面の最も興味の深い、半身づゝを踊り分ける難かしい所につゞく一つのからだで、柔と剛との双面を踊り分けるので、これには手の形一つにも口傳があるといはれる程のものである。曲の變化もあり、振りの妙、色氣と懷味の交錯した面白さ、流行のエロとグロの興味を一〇〇パーセント發揮する所なのである。

姿は消えてで、引張りの見得で幕になるのが普通であるが東京では松浦五郎則光など、名乗る押戻しの出ることもある。はじめから説いたやうに、いろいろと複雑な變化の道程を踏んできてゐるだけ、詞章、歌曲なども一致せず、大阪系の大いに古典的なものと、江戸系の末期的色彩の多いのとは、曲節は勿論、詞章の上でもかなりの差があるので、これを對照して部分部分を検討すれば面白いのだが、今はその餘裕がない。

天明所演の仲藏なり團藏なりの双面の感じは、寧ろ大阪狂言の方に豊富に残つてゐるやうだが、時節柄、双面といへば殆んど江戸風になつてしまつた。

かく、二つの系統はあるが、双面がよく舞臺に現れるのは、畫面の美、作曲の妙ばかりでなく、舞踊上の技巧も腕次第、思ふさま發揮することのできる變化にとんだ面白いもの、一つであるからである。

双面水照月

(鶯 鷓 石)



しづ おいたはしい姫君さま死ぬる今は際迄
も松若さまの事を思召しかたみに送りし一首
のうた

くみ 又とだに思はぬ中の別れ路は

松若 詞のこりて名をや恨みんふびんナ家形て
あつたナア

しづ かやうなものがござりましては姫君さま
の迷ひの種、一時のけむりとなしたまはど未
來は成佛なされますやう

三人 南無阿彌陀佛

大どろくになり三人もんぜつす
るドロく打上げ

〽白浪か雲かあらぬか煩惱のだらくにうせ
し法界坊姫が魂魄さそひ来て姿は一トツ
ニ夕面恨みを爰にありくと同じ出立の

やさ姿

此文句のきれ花道のすつほんより
法界坊のお組對の着付けしのぶ籠
を持ちせり上る大どろく 打上げ

〽わしが在所は京の田舎の片ほとり八瀬や
小原や芹生の里世をしのぶゆゑ姫御前の
身褌からげ葱賣らんせんかいナア、かは
んせんかいナ世をしのぶ葱の亂れ限りな

き恨みの刃に情なやうかみもやうでその
人のつれ添ふ事の恨めしくうつらくと
迷ひ來る、小船間近く立寄れば
文句の切れ寝鳥になり舞臺へ來る
松若おしづ兩人心付き顔見合せ

しづ テモ今のは恐ろしい事でムりましたナア
松若法界坊を見て

松若 やそなたはお組じやないか

野分附聲 アイ組じやわいなア

おつゆお組をみて

しづ モウシくお組さまのうく

お組を呼むける是にて心付き

くみ ヲ、松若さま恐ろしい事でムりましたナア

兩人雙方を見やり呆れたるこなし

松若 ヲ、そなたもお組こちらもお組コリヤど
うじやぞいのう

しづ ほんにこちらもお組であちらもお組さま

松若 お組が二人になつたわいの

しづ コリヤまアひよんな事じやナア

何をいわしやんすでないア、わたしをの

けて外にお組が有つてよいものかいナア

しづ 法界坊お組のいふ通りおふむする

し離魂病とやらは姿を分る病と聞いてはみれ

どみるは初めて

松若 但し狐狸の降化なるか

しづ 何にいたせわたしにお任せなされませ

しづ 云ひながら法界坊の傍へ来て

しづ お前の名は何といひますへ

附聲 アイ私や組といふわいなア

しづ コリヤモウさつばり譯がわからぬ、ヲ、

それく誠のお組まならいづぞや兩國の中

村や踊り初の有つた時の振り事わたしやよ

ふ覺へて居りますがお前も夫を覺へてかへ

くみ それ忘れてよいものかいなア

しづ お前もかへ

附聲 それ忘れてよいものかいなア

しづ そんならそのふり事を一寸突て

見せうかへ

しづ みませうわいなア

附聲 サア夫は

しづ どうでござんす

取かし乍ら一寸小づまをこふ取つて

尾花招げばうなづく小秋何をくねるぞ女

郎花わしやかわゆうてならぬのに扱ても

ゑにしが朝顔ならば里の女らそれは見や

せまい開くをく何がひらいたを見やせ

まいサアなアくそうじやといふ人葱

の草隙れ

よらしくふりあつて留る、おしづ
思ひ入りあつて

しづ イヤモあんまり不思議で猶々合點が参り

ませぬモウくちらのお組さま松若様が必要

助と名を替へてお前さまのお内へお出なされ

と時からの事またなれそめの初まりはお前よ

り外知つたものはござりまぬ中へその咄を

聞ませふわいなア

くみ サアその別染の咄しハナ

しづ そんなら突て聞きませふ

くみ サア取かしい事乍ら

過ぎにし梅の花見月、目見え初めと手を

突いてふつと見合す顔と顔いとらししふ

てやさがたでほんに思へばいたづらな人

の前髪何のその嗜んでみても忘れられぬ目

先にも葉平さんも及びやせまい殿ぶりと

惚れて心で響て居てついした役になつた

のがつもりてくいていつしかに桃と櫻の

色くらべ、ひいな遊びのさゝ事に取かし

乍ら孟さした私しが心意氣紅がついた

といふたれぞそこから呑んで下さんした

この姫しさに孟を二世のかためと取り

かわしツイ手枕のそゞ葉直してあげふ

と響にお前の紋のさし込みは瘡といふ

もの初めて知つた、外の殿御は露しらず

思ひこがるゝわたしぢやもの、何の心が

變らふとあなたへひげばこなたへもつれ

もつるゝ糸柳風にもまるゝ風情なり

しづ おしづはこれと見るよりも中をへだてる

小柴垣どちらもく茶の花、若木の蕪り

床しさにみとれて居さんす其中へ内の子

飼の長ためが阿泉のくせにいや雅な遊び

にかこつけてめんない千鳥濱千鳥散りて

は暮ふ磯隠れ始終をおつゆがとめても

とどめ兼ねたる妹春濃紫や振袖の垣根

にまどふ草の放れがたき風情なり誰逆も

思ひは同じ飛鳥川瀬と替はり行く昨日今

日修羅の苦患も晴やらず名のらで知れや

我思ひじつと見る目の物凄く

松若様

附聲 お細どの

法界坊 うらめしの心や人の恨みの深くして刃に

かゝりし身の因果生きて此世にあるなら

ばいとし殿御と添ひもせう可愛女と寝ん

ものをなま中出家を遂げし身は苦患にた

へられ發心の中立を忘れしも皆誰ゆえぞ

お組ゆえ

法界坊 わたしが迷ひは松若様雅なじみの言葉

すへを頼みの甲斐もなく思はぬ愛目三瀬

川胸へ漲る思ひの淵



吉右衛門に寄する

遠藤爲春

吉右衛門の道頓堀出演は大正十五年十一月以來で五年振であります、久々の出演で演物についていろいろ考究したのであります、結局は吉右衛門が最も得意とする一谷の陣門から陣屋までと、湯殿の長兵衛とを撰定したのであります。一座に小次郎敦盛、義経に最も適した宗十郎、彌陀六、水野十郎左衛門の適任たる友右衛門のあることも、此撰定に大なる力となつたことはいふまでもないのであります。

熊谷と長兵衛は吉右衛門が數有る當り役中の指定のものであります。東京の劇壇に於て現今これを演ずる人は中車、幸四郎位のものでせうが茲に其比較評は省きますが決して人後に落ちない傑作であります。

熊谷は現在東京で行はれてゐるのは市川流と中村流との二つであります、吉右衛門のは市川型に依つてゐます。九代目團十郎其儘の型を踏襲してゐるのであります。熊谷に就ては別にいふ場

合もありませうから茲には長兵衛に就て聊か所見を述べませう「極附幡隨長兵衛」の書下されたのは明治十四年十月の春木座であります。作者は河竹默阿彌、俳優は市川團十郎であることは申迄もないことで、水野十郎左衛門は市川權十郎であります。黒鷲と櫻川との角力出入から湯殿で殺害される筋で大當りの芝居であつたのであります。湯殿の立廻りは正本にはチヨボ入りであつたのを團十郎が合方なし柔術の左手を用ひたのが一日中の見ものであつたのであります。猶、長兵衛が水野に突かれての唸り聲は養父權之助が強盜の爲め殺害されし當時の唸り聲を活用したことは有名なことであります。

序ですが、この書下しるときは長兵衛が一番目狂言で中幕が近江源氏八ツ目、團十郎が長兵衛と盛綱を演じたのであります。今度、廣太郎の演じる一子長松を、竹松即ち今の羽左衛門、中幕の小四郎を金太郎即ち今の幸四郎が演じてゐるのは別に不

米吉改め 中村ほしも

中村吉右衛門の末弟米吉改め中村もしほは昨年十月東京にて改名したが、改名後初めての大阪出演に當り、九月の中座東京大歌舞伎で改名披露をしてゐる。

もしほは明治四十四年七月東京市淺草區富士横町に生れ、本名は波野聖次、大正五年、八歳にて、米吉を名乗り、兄吉右衛門の幡隨院長兵衛にて一子長松を勤めたのが初舞臺、以來兄の一座で修行。

此の度の披露お目見得の後は、中幕双面水照月の娘おくみで、宗十郎時藏田之助の善舞と共に優艶な舞臺を見せてゐる。

尙「一の谷」と双面との間に、吉右衛門一家一門に、宗十郎も列席にて、古風な口上幕の一場が設けられてゐる。

もしほは祖父歌六の幼名にて初舞臺も長兵衛でありこの度の披露も兄吉右衛門が得意の出し物長兵衛の上場と共に演るのものにかしら因縁がしのばれて床しい。

議ではないかもしれませんが懐かしい思い出であります。

それから團十郎二度目の上演は明治十七年六月の新富座であります。このときは團、菊、左の大一座であります。水野は左團次であります、三度目は明治廿年八月の千歳座で、水野は前通り左團次が演じて居ます。このときの長松は、ほたん今の左團次であります。

四度目は明治二十四年六月の歌舞伎座で、これが東京での團十郎最後の上演であります。このとき角力の出入を書き替えて現今演じる芝居の喧嘩になつたのであります。櫻痴居士の執筆で金平法門諱と名題を据え、新藏が金平に扮して好評を博したのであります。水野は權十郎、女房は秀調、八百藏(中車)の唐犬權之助(故段四郎)の坂田金左衛門、新藏の近藤登之助等は誠に顔揃ひの配役であります。

權之助の坂田金左衛門が歌舞伎座の正面棧敷から飛び下りたのはこのときであります。

水野役は前に書いた通り左團次と權十郎より演じてゐないのがあります、どつちも適材といへませうが殊に權十郎の水野は絶品として後世に傳へられてゐる傑作であります。

團十郎の長兵衛は同僚の世話物中第一位に推す絶品であります。明治三十一年大阪梅田歌舞伎座に招聘されたとき忠臣藏、大森彦七、と此長兵衛を上演したのであります。そのときは水野が中車(當時八百藏)女房は女寅(後の門之助)が演じたこととは阪地好劇家の記憶に新なること、思ひます。

團十郎に私淑した吉右衛門の長兵衛實に九代目に髣髴たるものがあります。久々での道頓堀出演に阪地好劇家の期待に添ふべき傑作たることは小生の私に自負する處であります。



酒樽長兵衛と湯殿の長兵衛

倉田啓明

東京の帝國劇場がまだ建設されて、幾何も経たない頃、舊幕臣家の家に生れ、歴史小説家として知られた塚原澁柿園の「黄金五枚」といふ作が脚色されて、松本幸四郎が主人公の水野十郎左衛門に扮したことがあつた。脚色者はたしか右田寅彦だと記憶してゐるが、その際芝居三田功運寺が水野家代々の菩提所だから、俳優や關係者一同が展墓したが、たま〜青山高樹町に住んでゐた水野某といふ人が、十郎左衛門傍系の子孫にあたるといふのでともに参加したことがあつた。この人はその頃官達に勤めてゐたやうだが、談端なくも十郎左衛門と隨院長兵衛の事に及ぶと、さすがに祖先のことは誰しも悪く言はれると腹も立たうし、よし曲事を内心認めてゐても辯明したいのが人情だから、氏も言葉をつくして十郎左衛門のために釋明を試み、更に箔を附けて、四谷六法白柄組の暴狀に、一脈颯爽たる武士道の發露を高揚したものだつた。

然しこれはまづ別問題として、水野が長兵衛を自邸に誘殺した一件については、在來の神史野乘乃至芝居講談とはまったく相違した。事實を真相として語つたのを聽聞した。即ち氏の説によると——これがまた水野家累代の口碑として傳へられてゐるのだらうが——十郎左衛門を頭梁とする所謂白柄組（その實白柄にあらずして剛健素林の氣風を表はすために棕櫚で刀襦を卷いたといふから棕櫚柄組が正しいとも言へるのだが、白馬銀鞍の風流公子に擬へて白柄組と美化したところに、却つて浪漫的な興味を感ずるわけだ）は、日頃目の敵にして怨嫉と憎惡の焰を燃してゐた町奴一方の首領隨院長兵衛の命を奪ふために、わざと水野邸へ招引したわけではない。唯近來長兵衛の英名が江戸府内に高まるので、旗本奴の面々は一種の興味と妙な反抗心に驅られ、一夕無禮講の席上に招いて、どんな男だからそのしやつ面を酒の肴にしてやらうといふほどの氣持だつた。

ところが市井遊侠の町奴でも、さすが長兵衛は膽斗の如き男と見えて怯めず臆せず推參に及んだものだ。席をとりもつものには美しい變童が來てゐた。何しろ戰國時代を去ること未だ幾何ならぬ頃だから、彼等剛健の氣風を誇る一類の間には、女色よりも男色が悦ばれたのも無理ではない。また變童にしても當時のは安永天明以後のやうに女装した柔弱な輩でなく、水々しい前髪立の美少年だ。

ところが果然、水野はじめ旗本奴の震怒を買ふ事件が持ちあがつたものだ。それはこの宴席に侍つた變童連が、どういふものか主人側の旗本奴に對して酌もろくにせず、長兵衛一人にちやほやしてその身邊を離れない。だから水野は赫となつた。水野でなくとも誰だつてこれは赫となるにちがひない。まして町奴には怨恨がある。嫉妬もある。うぬツ素町人めツ、どうするるか見て居れ。」といふので、水野をはじめあぶれ者の面々、いきなり大身の槍を引ツ仕扱ひして酒樽もろとも長兵衛を出樂刺しにしたといふのだ。さうだおそらく満座は血酒の河、變童の中には田樂刺しのお相伴を受けたものもあつたらう。

これが事件の真相であると、氏が語つたのをウロおほえに今でも覺えてゐるが、多分かうしたことが真相でなくとも、真相に近いものだらうと觀測する。それもさうだらう。苟且にも白柄組の旗本奴ともあらうものがだ名寡が町奴一匹を料理するに業々しいトリツクを使ひ、衣服にわざと酒をこぼしてみたり、

それを勿怪の口實に水澤湯の定紋散らしの浴衣一枚にさせ、湯殿へ誘導して、御町噂にも柔道の稽古に藉口し、眞の當身で殺すとは言語道斷と怒つて、家重代の大身槍を持ち出すなんかあまりに卑怯で、計略に念が入り過ぎて、どうも水野の氣宇が小さく見える。こんな尻の穴の小さい男が白柄組の頭梁だつたとはいさゝか受取りかねる次第だ。

そこで變童のサーピスが不公平なので、とつさの間に怒心頭に發し劍菱男山の酒樽もろとも突殺した方が、甚だ明朝にして痛快、芝居の舞臺には一寸不向でも事實としてはよほど面白いではないか。

後代の作者が湯殿で誘殺することに創作したのは、い、思ひつきに相違なく、既に歴史上の人物で湯殿において殺害されたものはかなりある。源義朝がさうだ。源頼家がさうだ。頼家を修禪寺の浴室で殺す時などは、力士を使つたり投繩を用ひたりしたさうだ。北條義時の家人金窪太郎行親といふ男が、義時の命を受けてやつた仕事だが、如何にも義時流の陰險さがまざくゝとあらはれてゐる。けれども水野等の性格を推測すると竹を割つたやうな氣性で粗暴の譏はあつても、さほど陰險な奸智に長けた人間とはおもはれない。してみれば湯殿の殺人事件は創作にちがひないといふことになる。

それにしても、旗本と町奴の階級鬭争は、近年劍劇に映畫に大衆文學にさまざまに書き古された主題だが、實際、寛永明曆

の間には、この暴れ者の旗本奴が八百八町に跳梁して、市民の迷惑甚しいものがあつた。次いでそれに對抗して町奴が擡頭し相互の間に勢力争ひを演じて始末に悪かつたので、幕府も手を焼いて屢々取締令を發布した揚句、承應三年十月に、まづ町奴三十四人を逮捕し、それから漸次旗本奴の處分をした。おかげで寛文を過ぎ延寶に及ぶとよほど靜謐になつて、旗本奴の末流は風流道に參じ、やがて中葉の天明になると女色に溺れて情死まで試みる藤枝外記のやうな人間があらはれたり、或は鳥追に懸慕して一生を棒に振つた座光寺源三郎などが飛び出した、甚しきは押借強請專業の大河内善兵衛此村大吉輩がのさばるに至つた。

然し初期の旗本奴と言ひ町奴といふ連中は、いづれも男伊達の遊俠だの言はれてゐるが、その實現代の所謂暴力團に等しい不逞無頼が徒黨を組んで、府内を荒しまはつたのだ。そして今日の暴力團と多少異なるところは、私利私慾に走らず多少たりとも強きを挫き弱きを扶くる殊勝な仁俠の志があつた點である。これは清廉潔白を尊んだ武士道精神のおかけにちがひないが、それと同時に彼等に生活難がなかつたためでもある。これはマルクスの唯物論的辯證法を借用しないでも、當時はまだ我國資本主義の萌芽時代で、生活苦を體驗してゐるのは浪人群だけで、水野一味のやうな三河安城譜代の旗本は過分の知行を獲て無聊に惱んでゐる際だ。そこへ物慾よりも名譽慾のた

めに大名に對する不平があつて、その不平感を發散しようとして江戸中を暴れまはつたに過ぎないのだ。洵に稚氣愛すべき徒輩と謂はざるを得ない。

水野が誇るべき敵長兵衛を屠つて後、次第に人生の寂寥感に囚はれるといふ人間心理の機微を主題にしたのに綺堂の「水野十郎左衛門」があるが、水野の如き粗豪な男にもたしかにかういふ心理の推移はあつたらう。然し今日になつて考へると、長兵衛も水野のために田樂刺しにされたおかげで、雷名を竹帛に垂れたわけ、殺した方も殺された方も共に一世の大立物だつたのは双方にとつて頗る幸福といふべきだ。かうなると長兵衛も死場所を得て死花を咲かしたのだ。唐犬權兵衛は長兵衛より一枚上の市井の遊俠だつたが、今日になるとその聲價は長兵衛に劣る。またよしや組の頭目三浦小次郎義也も、水野より手上のものとして「武器目録」にあるが、今の人にはやはり水野の方が適に有名である。同じく切腹を命ぜられても水野は長兵衛を殺したおかげで一段得をした勘定だ。

もつと男伊達について述べたいが、與へられた紙數がなくなりさうだから、ではこの邊で當面の題目中村吉右衛門の演ずるところの「極附幡隨長兵衛」の劇談に移らう。

この芝居は故人九代目團十郎が、そのむかし梅田の歌舞伎座で演じたのを幼少の砌見て以來、僕はいろ／＼の人の所謂を見たら一寸想ひ出しただけでも中車、左團次、幸四郎、吉右衛門

その他二流三流所の役者を勘定に入れたら、かなり澤山あるが、ハツキリと印象に残つてゐると言へば、やはり播磨屋の「今度中座の「一谷嫩軍記」にしても、陣屋の熊谷は他に別様の意味に於て佳作があるが、たとへば大阪の成駒屋のその如き——陣門から組打、擅持山になると、九代目團洲の遺鉢を傳へそれに深刻な心理描寫を賦與した吉右衛門が、當代無双の熊谷役者である。全くあれまでに悲壯美を表現し得るものは他に算め難い。湯殿の長兵衛にしてもさうで、悲壯な長兵衛の心理的表現は完璧に近いまで演出される、實際吉右衛門のかうした芝居を見てゐると呼吸詰まるやうな氣持になつて、汗かきの吉右衛門以上、見物のわれ／＼まで手に汗を握るのだ。だから彼の演技には古風な錦繪式の歌舞伎の味は乏しい。然しノンキな歌舞伎に近代的精神といふか、人間味といふか、とにもかくにも生きた人間の魂を吹込んだ功績だけは、何としても没却することは不可能だ。近世の偉大な偶像だつた團十郎のオーソックスとしての吉右衛門は、祖師好みの活歴を人間描寫に置換したのだ。彼の長兵衛が一条亂れぬ堅實な中車よりも、颯爽明快な左團次よりも、又師匠譲りを金看板の幸四郎よりも世評が高いのは當代第一流の人氣役者のせいもあるが、一面に於て彼特有の悲壯美が異彩を放つからであらう。

僕一個の偏痴氣論から言へば、この芝居は妻子の別れを描く内の場のやうな舊劇にさらにある常套的場景よりも、又見せ場

の湯殿などよりも、序幕の村山座の舞臺が面白い。あの古風な「公平法問諍」も劇中劇として興味があり、花道で坂田を懲らす長兵衛、棧敷から白羅紗羽織の姿を現はす水野、その互に敵意を挟んだ應酬、舞臺の役者や座方の狼狽振り、幕切れの骨法如何に厳しい殘暮と雖この一幕を見れば涼爽の氣自ら湧く、かうした芝居に比較的馴染の薄い大阪の見物は是非この際見ておく必要がある。なほこの芝居のワキ役の水野は颯爽たる風格がなければならぬ。この點現今では左團次に優るものはなく、菊五郎は駄々兒の如く、今度の大友は果してどうか。湯殿の有名な名臺詞「ちやうど時候も木の芽時、繁る樹木に行く道も遠き冥土の十萬億土……」のあたり凜々たる名調子で大向をうならせるのだ。近來は大抵この湯殿で幕を切るが、矢張り乾分が棺桶を擔いで親分の報復に来るのを、三浦小次郎が駆けつけ理義を説いて引取らせる一場を點綴した方が見物も得心がゆくだらう。

さて五年振で來阪する播磨屋も、平素虚弱な人だがそれだけ養生がい／＼と見えてこの暑さにも怯けず、熊谷と長兵衛の熱演でお目見得は甚だ慶賀すべきことだ。前にもいふたやうに彼の擅持山は天下第一品の折紙附、長兵衛も名題の示す通り極附、どう轉んだつて失敗する氣づかひなし安全第一主義の獻立だが、一幕位アンピシヤスなものがあつてもと、我等聊物足りないのは隨を得て蜀を望むものか。

河竹默阿彌作

極附幡隨長兵衛 三幕

●村山座喧嘩の場

江戸福宜町村山座は金平の狂言で大入りをもつてゐるのです。

今舞臺では大薩摩淨瑠璃になり——扱て、人皇六十代後朱雀院の御守とよ、鎮守府將軍伊豫守源頼義公と申せしは、攝津守頼光の御甥にて天下の武職司どり二條の御所に在します——その名狂言に見惚れてゐる見物、文字通り土間座敷の客は片唾をのんでゐるのでした。

「いやだ、了簡ならねえ、うしやがれツ」と揚幕の方で叫ぶ聲。その暴れてゐる男は水野の仲間でした。舞臺番の留吉は花道へ駆けあがつてそれをなだめるのです。

「狂言半に是へ出られちや舞臺の障りになりますから了簡して下せえ」

「何！おれを誰だと思やあがる憚りながら天下直參白柄組の頭と呼ばれる水野様の中間様だ」

場内は怒號混亂の渦です。

舞臺番は懸命にそれを引留め、遂に表へ突き出します。再び揚幕の彼方より現れた男、それは坂田金左衛門

「イヤ、其の狂言暫らく待て」

舞臺のものも、観客もそれには愕然としました。舞臺番の新吉は恐れ、前に出て

「何故お止めなさいました」

「何せとは不埒な奴め、身共屋敷の草履とりをよくも唯今辱しめたな」

「いえ——唯舞臺の邪魔になりますのでお腹立ちではございませうが、御勘辨なさいまし」

「いや、勘辨罷りならぬ、諸人のみせしめかうしてくれ——」

と、首筋を取つて引きすへ、その上にどつかと腹をかけるのでした。

「身共は坂田金平が末孫たる坂田金左衛門——サア、役者共もうよろしいから今の後を初める——」

と暴言を吐く。折柄、見物の内から姿を見せたのは幡隨院の長兵衛でした。縮の羽織に一本差。

「ア、申しそこ御見物なさいましては役者は仕にくし、元の所に歸つて御神妙に見物を願います」

「いや、素町人——とやかかく申して出過ぎた奴一體われはどこのどいつだ」

「其のお尋ねに預りまして名乗るもケチな人入れ稼業、花川戸の長兵衛といふ素町人でございます」

長兵衛と知つて、金左衛門はきよいれる處か遂には喧嘩を吹つかけるのです。

「名は幡隨院の長兵衛でも佛になるのはまだ早へ、憚りながら蟲くらでは切れませぬ、悪くじたばたしやアがつたらそつちの首がころげるから能く用心して切つて見なせえ」と逆に、金左衛門を懲らすのでした。

この時、下手棧敷に居た水野千郎左衛門

「そちが手の内千郎左衛門、是にて慥に見届け

と、憤怒の眸で、彼を見据える——。

●花川戸長兵衛内

水野千郎左衛門方より用人保昌武者を使ひに

して、長兵衛に入懇を結びたければ、是非お越しを願ひたいといふ。

「仰せに随ひ後刻参上仕ります」

キツパリいひ切つて使ひを返す長兵衛女房は

じめめ子分共はその身を案じて詰よる。

「そりや何も約束したといふでもなし、断つてもいゝけれど白柄組を恐れるやうでは長兵衛ばかりか町奴の名折れになる後に行く」と云つてやつたのも男の魂だ」

その急をきいて駈けつけて来たのは唐犬權兵衛。

「ア、兄貴まだ内であつたか」

「お、唐犬」

「わしを代りにやつて下せ」

唐犬はじめ右を左に、と口説かれる長兵衛、

そうしてひとと一子長松を抱きよせ。

「八参半を賣らうとも商賣往來にある稼業をさしてな、女房や子供に泣きを見せるな、お時

今おれの云つた事を能く覚えて置け……、唐犬

はじめ手前達のいふ事を聞かねえのは去りとは

分らねえやうだと思ふだらうが人は一代名は未

代の幡隨長兵衛、今日が命の捨て時だ、唐犬止

めずにきようにやつてくれ、よう」

決然——長兵衛は水野の邸へ！

水野十郎左衛門邸の場

水野の邸では家臣のものどもが、幡隨院長兵衛の来るのを手ぐすね引いて待つてゐるので

やがて長兵衛は家臣の案内で、花道から出ます

おくれもせず、わるびれもせず座につきます、

十郎左衛門は奥から出て来ます。

「今日は遠路の所、迎ひに應じてよふこそ入来

我等は水野十郎左衛門以後懇意に致しくりや

れ」

「お噂な挨拶です、長兵衛もいんぎんに禮を返

します、近藤登之助も遅刻を詫言ながら来て座

につき、長兵衛と初對間の挨拶がすむと、早速

酒宴になります、長兵衛は元出羽の浪人であつ

たと云ふので、話は武藝のことになつて家臣等

は立會を望みます、いなむ長兵衛の前にもう木

刀が運ばれて、止むなく長兵衛は家臣と立會ひ

苦もなく負かしてしまふのです、登之助も木刀

を打ち落されて、今更ながら長兵衛の手の内に

感心するのです。

「イエそれは手前より申上ること、連れ腹れし

殿様の御手練恐れ入りました」

長兵衛は謙遜して再び座につくと、又酒宴に

なりましたが、十郎左衛門は無理に大盃をす

めるのです、家臣は酌をするといつて故意に長

兵衛の衣服に酒をかけるのです、十郎左衛門は

着替えの衣服を運べと命じるのですが、腰元、

家臣のものどもは口を揃へて、着替えの前に一

ト風呂浴びよとすゝめるのです、長兵衛も今は

いなむこともならず、風呂へ立つのでした。

向湯殿の場

邸相應敷奇を凝らした、大きな風呂湯です、

腰元に案内されて、澤海模様の浴衣に水色の

しごきを巻いた長兵衛が出来ます、風呂湯の結構

をほめてゐると、家臣が湯加減も好いからとす

ゝめるのです、油断を見て家臣四五人長兵衛に

組つか、長兵衛は柔術で苦もなく投げ、或は

當身で倒してしまふのです、釋十文字に大身の

鎧を持つた十郎左衛門が現はれる。

「是迄敷度の喧嘩より白柄組と町奴、互に敵同

様に意根に思ひ居たるも水に流し今日より長く

悪意を結ばんと、酒宴を催し招きしが、酒典に

乗じ柔術の試合を只今望みしが、如何に家來が

未熟なりとて眞の當身で殺すといふは不屈至極

のそちが振舞、最早勘辨相成らねば、一旦結び

し親友の因みを斷ち切り、そちが一命、今日の

着に致してくれる。

十郎左衛門は鎧をしごいて長兵衛に突つける

のです、長兵衛も男一匹、泰然自若として

「いかにも命は差上ませう、兄弟分や子分の者

が留めるもきかず只一人、迎へに應じて山の手へ流れる水も逆のぼる、水野の邸へ出て来たは素より命は捨てる覚悟、百まで生きるも水子で死ぬも、持つて生れた其身の定業、卑怯に人手を頼まずと、初手からこんが呉れると云や、名におふ天下のお旗本、八千石の知行取り、相手に取つて不足はねえ、綺麗に命をやらふから度胸のすわつた此胸をサア、すつぱりと突きつせえ。

長兵衛は胸を抜けて、鎧の穂先の突出るのを待つばかり、二人はじつと氣合をはかる十郎左衛門の突出した鎧は、長兵衛有合ふ柄杓にはねのけ、身を替はしするの十郎左衛門もあしらひ兼ねた體です、後に忍んだ登之助は卑怯にも長兵衛の後から無惨の一太刀を浴びせました、ひるむ隨に十郎左衛門の鎧は長兵衛の胸へ………とところへ家臣が長兵衛の身内のものが早桶を持つて、長兵衛を迎へに来たと告げた、十郎左衛門も長兵衛の覺悟のよきに思はず、感嘆の聲を放ちます。

○水道橋仕返しの場合

長兵衛の子分のものどもが、水野の邸へ親分の仕返しに来るといふので、白柄組の旗本が此處夜の水道橋際まで、迎へ討たうといふので、長兵衛の子分細藤、身こしらへ甲斐々々しく水

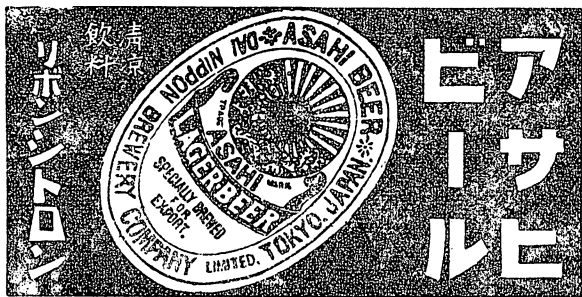
野の邸へ切入らうと、出て来るのですが、旗本達にはばまれます。

「軍に云やア軍神の血祭り替りに喧嘩の魁」「花を咲して町奴の腕前見せてやるからにや」「氣早の若い町奴、覺悟しやがれとばかり、抜きつれて旗本にかゝつて行くのです。」

亂闘………
血の雨が降らうといふのです。
三浦小次郎が従者に提燈を持たして、駈けて来ます、亂闘の中へ割つて入り、聲をかけた雙方を止める。

「斯く止めしは外ならず、今日晴隨院長兵衛が水野の邸へ参りしは素より死する覺悟にて、跡へ難儀をかけたまじと計らひたるに相違なし、然るに水野は明け四つ時支配所へ呼出されて揚屋入りと事極まれば、日ならず切腹仰付らるゝ趣、只今伺ひ参つたれば最早天下の科人に手出しを致す事相成らず」

嚴かに皆の者に云ふのでした。白柄組のものは呆然として、やがて我身にも及ぶことだらうと今までの勇氣もどこへやらで、子分達は之を聞いて此上にこと死立ては、亡き親分の折角の心盡しも水の泡と、引上るのでした。



アサヒビール

リボン

秋の夜の好讀物

新興演劇

九月五日發行・定價金參拾五錢

— 戲 曲 —

前のフイイザ夫人(三幕)……セン・ジョン・テーパーン山田松太郎譯

大蛇ナンセンス(三幕)……鳥江鍊也

貫はれて行く狗兒(一幕)……豊岡佐一郎

モデル問題(二場)……山上貞一

— 小論文・隨筆 —

明日の劇場への階梯……野淵昶

— 新著ごりぐ —

編輯後記……同人

表紙繪・カット……森 亶次郎

新興演劇社

大阪市東區
船越二丁目

發行所

家庭劇の更新に就て

曾 我 の 家 十 吾

家庭劇の更新と、今更云ふまでもなく七、八兩月、ゆつくり休養して得た英氣凛々、それに小織氏、十次郎氏の復歸は一段の心強さを覺へ、自から總身に力瘤の出るのを覺へます。

然し家庭劇の喜劇は、從來屢々一部の人物から低級卑俗の非難を耳にしますが喜劇は元々低級な世話劇です。世話と云ふ俗趣味から生れた其の頃の喜劇の取材は、都市の日日の出来事を脚色し道化師特に滑稽な人物が登場して世人が全く思ひつかぬ反語、反動で無理から揆つて笑はしたものです。

近代喜劇と云へども今だに喜劇と世話と云ふ二つの物が、はつきり分離してはいません全々高級な喜劇は無いでわ無いが極めて少ないのです、それが證據に今だに取材の九分九厘までが世話であります。貧富の差異、不合理なる制度組織、階級的な優越、そこに潜在してゐる因襲、迷蒙の禍根が、實生活に及ぼす影響を社會的に批判し分析する。其の上滑稽、諧謔を投じ皮肉と諷刺な反語を浴せる仕組になつてゐます、インツエニールンダ即ち動作背景、圖案、配光の要求を調和して上演される脚本、特種な性質を表す脚色家、意匠家は、寫實「自然」を

再現せんと近時益々強く現實生活に喰ひ入て、俗趣味と切ても切れぬ深い關係を持つて離なれる事が出来なくなつてゐます。いづれの國も世界の大家は皆な高級な趣味を持つておりません、倫敦、紐育の華麗な大ビルディングの陰にも支那やメキシコの泥棒市場の様な薄穢ない大衆市場が強い魅力を持つてゐます私の横顔と最低限度の路傍商店街とが同じではありませんまいか。何人にも直ぐに愛され、親しみ易く一見何んでもない無造作な投げやりの店頭も見れば見る程細かい複雑な美しさと朗かさや軽く感じられる事は低級な喜劇と同一である。

富者の心、貧者不知すと笑われるかもしれませんが自慢氣の出る迄上品に飾りたてられた美麗と禮儀に縛られた高級食堂では、安易と自由の明るさの有る簡易食堂の如き満々たる愉快さは得られないと思ひます、有閑人が特に喫愛する、名茶より俗ではあるが清香と新味の豊溢せる大衆に嗜好される番茶の出花の如く、どこまでも俗であり簡易である一般の嗜好に適する大衆喜劇を二氏の復歸を好機會として茲に更新家庭劇の趣意を益々堅實に奮闘する私の心想です。(完)

私 の 抱 負

中 田 正 造

時代の要求は何時も一ツ所に止つてはゐりません。従つて観客の皆様に絶えず新らしき刺激を要求されてゐます。蓋し演劇に於ても其様であります。

茲に於て私は從來新聲劇の迎り來つた道を省みまして、斷然考ふる所がありました折柄山口俊雄君の加盟が決定されました茲に於て、山口、辻野、伊川と私の四人の結合によつて

當新聲劇の新らしき進路へ邁進する決心でゐます。就中、脚本の撰定には、より以上の努力を拂ひ、観客——新聲劇——時代——の三角形的締結をなし皆様の御期待に添ひたい覺悟でゐます。而して我新聲劇をして一九三〇年來に於ける尖端を行く劃期的な一大劇壇たらしむべく抱負して居る次第でゐます。

思ひ出のくさぐさ

— 新 聲 劇 —

德 田 純 宏

思ひ出——と云ふことは人間を弱氣にする。人間を消極的に扱ふ。そして進取的な精神を挫くものだと言ふ——

然し又、時には思ひ出と云ふことは、人間を冷靜にする。そして其處には淡ひセンチメンタルな味ひと、ロマンチックな潤

ひを漂はすものです。

昇天の太陽に向つて歡びと意氣を感じる者は、背後の月に對して悲しむと靜視を體驗した者でなければ眞に味ひ得ない境地でせう。

私は今、十有二年の歴史を有つた新聲劇に就いて、深い追憶を筆に移さうとしてゐる——。

或時、ある人が私に向つて——

「貴方は御存知ですか、十年許り前に、辨天座で、「其面影」と云ふ狂言で變つた新派劇團のあつたのを……よく入りましたネあの時は、あの劇團は何んとか云ふ名前でしたネ。」
「それですよ、新聲劇が旗上げした時の大阪第一回興行が……」

「へー。それぢや新聲劇も最初は新派劇をやつてゐたのですか、成程然う云はれてみるとそんな顔觸れだつたやうな氣がします。」

「然うなんです、その當時は、辻野良一、野澤英一、花村幹雄、伊藤綾之助、辰見小太郎、村尾碌兒、伊東好郎、日疋重亮、女優では富士野葛枝、三好榮子、玉村歌路等の諸クンがゐりました。」

「随分變つた連名だつたのですね。」

「それから後も種々と連名が變りました。一旦退座して又復歸した人もあります。旗上げ當時の新聲劇から今日までの新聲劇に關係した（入座したり退座したりした）重なる人々を掲げてみますと福井茂兵衛、高部幸次郎、小川隆、村尾碌兒、栗島狭衣、河部五郎、酒井淳之助、明石潮、小笠原茂夫、三好榮子、五月信子、玉村歌路、葛城文子、村瀬萬子等の諸クンを數へることが出来ます。」

「随分種々の俳優さんが出入りしたんですね、すると現在の富士野サンや、辻野サンは新聲劇の草分けですね。」

「さうです、然し二三度途中から他の劇團に移つた人もあります。」

「すると、河部五郎、酒井淳之助、小川隆、明石潮サンと云つた劇團の頭目株の人も以前は新聲劇の座員だつたのですねつまり出身は新聲劇道場と云ふ譯ですか。」

「然う云ひます——。」
「而し、そんなに種々雑多の俳優さんが入り替り立替りしてゐて、よく今日まで劇團に狂ひが出来ませんでしたね。」

「一寸妙な劇團ですよ。これと云ふ大きな中心があるでもなくして妙に續いてゐます。何日でしたか——ある性名學の心得ある人が恁んな事を云ひましたよ。「新聲劇」と云ふ三つの文字の劃數、配列、字義から云つて、此劇團は絶対に滅びな

い劇團だ、然したゞ常に姦しい聲が内部的に醸成されてゐる
そしてその聲は永久に消すことが出来ないと共に、その本體
が新聲劇を育成してゐるものだ——と、そんな事を聞いた覺
えがあります。

成程ね、左様聞けば、その判斷的な言葉の端々が合つてゐ
るやうにも思ひますね、

何れにしても目出度い劇團ですよ。

随か一回興行に昇進したことがありましたね。

ありました。大森痴雪氏が書卸された「血染の瀑布」とか

云ふ狂言でね——

さうだ、矢張り夏でしたね。

——そうそ、本水使用と云ふ趣向でね。

その頃は、随か今度復歸した山口俊雄サンなんか居ました
ね。

——然うです、山口クンとしての劍劇旺盛時代でした。

其處まで聞くと漸々思ひ出して來ましたよ……。「修羅八
荒」で飛んだ樂屋八荒になつた事をね——。

ハッハ……そんな話には餘り觸れたくありませんね、飛ん
だ樂屋落ちになりますからね——。

御尤もです。而しそれからでせう山口サンが「新潮劇」を
起したのは——。

——然うです、そして映畫界に入り、第一劇場に入りして、結

局芽出度く以前の古巣とも云ふ可き「新聲劇」に復歸したと
云ふ譯なんです。

——御圓滿ですか——？

——圓滿であるやう續かせたいと思ひます。

——續きませう、今後は！

——續かなければ嘘なんです、人格的な謙讓さを有ら合ひ乍ら
舞臺上の鬭争をして妥協しない限りはね。

——皮肉な問題ですね。

——當然な問題ですよ、劇團の社會的存在價値は其處から産れ
る物だと思ひます。

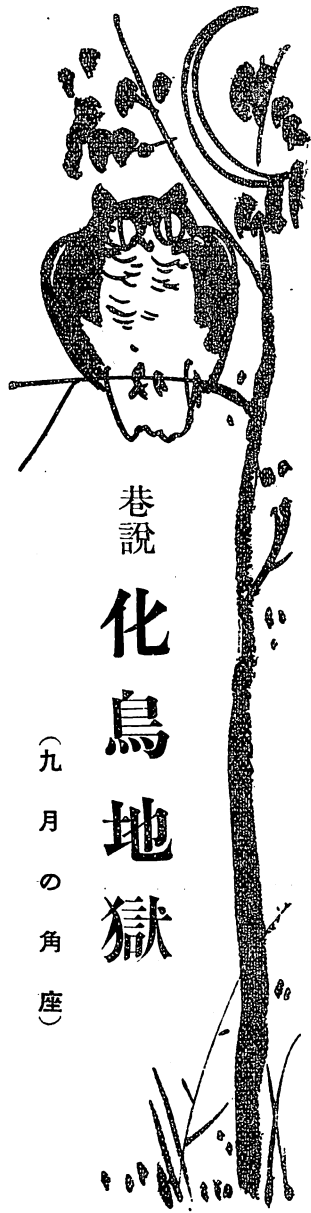
或人との新聲劇の追懷談は、私に妙な思ひ出を泛べさせた。
裏庭では已に秋らしい蟲の聲が聴えてゐる。

私は今堪らなく追想に耽らうとしてゐる。幻想の世界に孤遊
しやうとしてゐる。

逝つて仕舞つた福井茂兵衛、高部幸次郎、又は村尾碌兒、或
ひは辰見小太郎の諸クンの顔が澄み渡つた初秋の夜空に浮き出
て來る。

何れも嘗ては「新聲劇」のファンをして華やかなフットライ
トを聲援の渦に卷かした人々だ。

然し今では故人だ。寂しくも同僚の人々に葬はれて影を消し
た人々だ。（四一頁へつづく）



巷説 化鳥地獄

(九月の角座)

闇の中に、ほのかにすかして見える海風岬。浪花江戸堀、長州屋敷の名残をとどめる屋敷跡の原。

その原つばの真中に、凄(こ)い程の柳の大樹が一本、天を摩(さ)して突立(と)つてゐる。

真夏の夜――。

亥の刻過ぎだ。

一ツ、二ツ、暗夜の空に星が光(ひか)つてゐる。

犬の遠吠え。

「ちよいとツ……お前さん、何處(どこ)へ行(ゆ)のさツ」

「嫌(いや)よ私(わたし)、用(もち)もないのにこんな處(ところ)をほうつき廻(まわ)るの……涼(すず)みにしちやア酔(よ)狂(くる)過ぎるよ、ねエ鳥渡(とりわた)りつておくれよツ」

人(ひと)ツ子(こ)一人(ひとり)通(と)らない、闇(やみ)の中に確(たしか)に誰(だれ)か人(ひと)を

呼(よ)ぶ女の聲(こゑ)。

「お喜代(きよしろ)俺(おれ)らアお前(まへ)に話(わ)がある……」

突然(とつぜん)に男(おとこ)の聲(こゑ)。

男(おとこ)は熊谷(くまがや)要藏(ようざう)。女(むすめ)はその女房(にようぼう)お喜代(きよしろ)である。

「變(か)に改(か)まり出したもんだね、一體(いつたい)何(なに)んな話(わ)があるとお言(い)ひなの」

「お喜代(きよしろ)俺(おれ)らア近頃(ちかごろ)、稼業(かせぎ)が厭(いと)になつたのだ」

「え……おほムムム嫌(いや)だよ。此人(こゝろ)は……」

「解(わか)るめえな……」

「――」

「唐突(たうとつ)だが、俺(おれ)アお前(まへ)一人(ひとり)に改(か)心(しん)しろたア云(い)はねエ因果(いんが)な生(な)れ合(あ)い持(も)つた、たつた一人(ひとり)の弟(あに)さん、猪太郎(しごたろう)も俺(おれ)の思(おも)ひ通(と)にさせて見(み)せる」

「猪太郎(しごたろう)さんが、此(こ)稼業(かせぎ)を止(と)すだらうかね」

「止(と)させて見(み)せる、俺(おれ)の方(かた)で」

「私(わたし)や厭(いと)だよ、不承(ふじやう)知(ち)だよ」

「お喜代(きよしろ)ツ……俺(おれ)は一切(いっさい)の悪(あく)を憎(にく)む、そのため仕事(しごと)の血祭(ちまひ)だ……勘辨(かんべん)しろよ」

「邪惡(じあく)な渡世(わたりよ)から、足(あし)を洗(あら)つて……と發心(はつしん)した要藏(ようざう)は、その首途(くびと)の血祭(ちまひ)に、改(か)心(しん)を肯(う)せぬ現在(いま)の女房(にようぼう)お喜代(きよしろ)迄(まで)を斬(き)つて捨てた。

柳(やなぎ)の大樹(おおい)に張(は)り廻(まわ)された注連(しゆま)が無氣味(むきみ)に風に揺(ゆ)らいて、木兔(うさぎ)の啼(な)く聲(こゑ)が頻(しん)……

同じ夜(よ)。

月(つき)が出てゐる。

庚申(こうしん)家(け)のある松並木(まつなみき)。

要藏(ようざう)の弟(あに)さんと猪太郎(しごたろう)と、按察(あんさつ)を装(ま)ふ臯組(くさぐみ)の儀兵衛(ぎへいゑ)が邂逅(かいこう)した。然(しか)も、猪太郎(しごたろう)は岡(おか)ツ引(ひ)の手に

捕(と)へられた儀兵衛(ぎへいゑ)をまんまと救(すく)つたのだつた。

其上(そのうへ)に、猪太郎(しごたろう)は長州藩(ちやうしゅうはん)の隠密(いんみつ)大田(おおの)黒貢(くろきん)が所持(しよじ)した

捕(と)へられた儀兵衛(ぎへいゑ)をまんまと救(すく)つたのだつた。

其上(そのうへ)に、猪太郎(しごたろう)は長州藩(ちやうしゅうはん)の隠密(いんみつ)大田(おおの)黒貢(くろきん)が所持(しよじ)した

捕(と)へられた儀兵衛(ぎへいゑ)をまんまと救(すく)つたのだつた。

せる京都の桂小五郎宛の密書までも盗んでしまつた。

要蔵に殺されたお喜代に生き寫しの、その妹とお妻と、大田黒貢の邂逅……

月下の松並木の街道には、種々な人々の、種々な事件の發展性が醸し出される。

海を望み見る渡海屋の座敷。

ガツ……と大夕立が一傾り……あとは和やかな夕景。

遠く近く夏祭の囃子が賑やかに聞えてゐる。密書を奪はれて、藩籍を奪はれ失意の大田黒

は茲にかくれてゐる。

大田黒と、要蔵と、茲でゆくりなくも快談大いに共鳴をした。

が、まだ他に一人の女客。

旅の徒然に弾く三味の音が、微に閉ざした障子の中から響いて来る。

障子が開いてチラとみたお妻の顔に、

「お喜代……」

と、要蔵は危く叫びかけた。じぶん自分の手にかけた、お喜代の貰のお妻との邂逅。

二人の交渉は、眼に見えない宿命の糸にあやつられて、次第に深くなつて行く。

錦繪のはりませ障子。

昔の名残を止める箱提燈等。

内海一の廻船問屋、津の國屋庄右衛門が全盛時代の名残を僅にとゞめたその侘住居である。

一人娘のお紋は、その美貌の如く優しい心の持主で、兎兎として追つ手を逃れる猪太郎を兄と呼び兄の如く慕つてゐた。

「兄さん——飛んだことになりましたな——」

「男らしくもねえ愚痴だが俺もまさかどうまで

大田黒貞貞

中田正造



早くお手當が廻つてゐやうとは思はなかつた」

「ですから兄さん、なほのこと危い身體で無理をするより、どこへも行かないで、昨夜から隠れてゐた通り二階の奥の押入へ——」

「イヤ、待つてくれ、そいつは不可ねえのう、お紋ちゃん、昨夜こつそり歸つてからのお隠居様のお情、お前さんの心盡しはこの猪太郎、骨

身に沁みて有難えとも嬉しいとも思つてゐる。だが、彌六の奴の云つた通りにかう天の網を張り廻されては、たとへ運よく一時は遁れたところ

で、遅かれ早かれ御用の十手、捕繩に生取晒す俺の身體、そこもう一度自分の力で思ふ存分

キリ抜けた上、大勢の奴らに鼻を明させ、いゝ心持に腹の底から誰はばからず笑つてやりてえ

——これが猪太郎の樂みなんだ。御用の聲に脅

えたんぢやねえ、奴等の功名になつてやるのが癪なんだ、よどうだ解つてくれたかい？」

「妾、妾はそんな事を知りたいとは思ひませんそれより兄さんに私の心が解つて欲しい——」

と、云ふうちに、既に迫る追つ手。

お紋にあらぬ戀情を寄せる番頭彌六の奸策。猪太郎に去られて、狂氣の如きお紋は其處にあつた利鎌を手にとり、無意識に彌六の首へ

大寶山の中腹。

不意の捕物騒ぎに遭遇した大田黒が逃れて來てゐる。

其處へ先の日、松並木の街道で目明しに追はれた儀兵衛が忽然妾を現はした。

そして——

「お武家さん、ちよ一寸待つておくんさい、お前さんは密書とか、手紙とかを盗まれましたつ

たんでせう——さうでせう。何と相手の筋で御

座んせう」

「それを——？」
「それ許りか盗んだ相手も俺つしや、知つてゐるんだ。何うです。これぢや動けません。見えた處、その密書が固での御浪々らしいが、お察し申しますぞ」

「——で、盗んだ當の本人は？」

「それは、火の玉要藏つて大盜賊ですよ」

「えつ——」

事の一件を聞いて大田黒が、そよくと去つて行くその後、儀兵衛の耳許へ要藏の聲。

「儀兵衛、左様氣をもまなくとも、俺は此處にゐるぞ。」

「呀ッ頭……」

猪澤貞三郎



「ウハ、今日日は相憎く按摩ぢやなかつたのか」

「親分、勘、勘辨を——」

「面を冠るなよ、おい儀兵衛、療治序に一切合切を、あの夜お妻に俺の事を話してやつて呉れたと見えるな」

「——」

「よく聞かしてやつて呉れた。夫でこそ俺らの惱みも消えやう、あさましい戀心もなくなる計たれてやる。其證據にはお前達二人がああ夜以來一緒にやつて居るのを知つてゐたのだ」と、要藏の刀がギリギリ月光に冴へて光ると儀兵衛は片腕を垂られて、意氣地なくも脱兎の如く逃て行くのだつた。

それと、殆ど同時に兄を呼び求める猪太郎の聲。

不思議に夜目の利く要藏と猪太郎の邂逅。

要藏は猪太郎に改心を勧めるが相反する二つの心は、肉身でありながらも如何することも出さない。

「猪太郎——今度逢ふ時ア、場所も違はう又お前の生命を貰ふ時だ、いや此世から救ひ出してやる時だッ……」

去つて行く猪太郎を見送る要藏の背後から。

「姉の仇ッ——」

あおや

白鳥野サカ枝



と、矢庭に斬つて掛る女の聲。それと殆ど同時に。

「おッ、お喜代！」

と、お妻の腕を取ると啞然叫んで背後の塔の中へお妻を連れて這入つて行く。

後には、猪太郎を探し求める、氣の狂つたお紋の子守唄の哀調。

京都お妻の住居。

夜盜横行の噂が、議所合壁を騒がしてゐる。要藏と共に假の住居と定めてゐる、このお妻の家へ、然も要藏の留守中、飽迄要藏に敵意を

能くも両手は

山口俊雄



持ち腹に一物ある儀兵衛が、按腹に化けて訪れお妻にそれとなく、姉お喜代の仇敵要藏を討つやうに暗示して去るが、入れ違ひに立聞きしてゐた要藏が歸つて来て、却てお妻が儀兵衛を圖つて毒酒を盛つたことが判る。

七條の破

遠くに五條の大橋が見える。茲まで来た儀兵衛は、遂に毒酒が利いて通り掛りの猪太郎に見守られながら、悪黨に似合はぬへまな最期を遂げる。然も、毒を盛つた本人が要藏であること、京洛を横行する夜盗が要藏であること等々の嘘言を残して。

が、弱かにその場の顛末を覗つてゐた目明し布屋の甚五郎は、猪太郎と知りながら、要藏達を捕へるために猪太郎を利用せんとする。

洛北大長寺本堂。

廣々とした堂宇の中央に阿彌壇。

百目蟻燭が瞬いてゐる。

勤王討幕を畫策する同士大勢が屯してゐる。

その中へ、同志の一人として化け込んでゐる熊谷要藏。

それと知られた生死の境、白刃の下を逃れて要藏と、猪太郎の偶然の再會。

「兄さん！今度ア一年振りて約束もしねええて逢へたな」

「猪太郎、預けた返事は如何する」

「同じ事よ。骨が舍利になつても俺ら止めえよ」

「ぢや、どうして——」

「さうよ、だが兄哥、お前も矢張りやつてゐるんぢやねえのか、いゝや福田屋の千兩箱もお前の手口だと儀兵衛が云つたぜ」

「なに……」

と、さつと一閃。

「ウワツ、兄哥お前やつたな……」

「猪太郎ツ、可哀さうだが勘辨しろよ、兄の慈悲だお前の性根は恠うしなきや直らねえんだ」

と、血に染つて倒れた弟の面を凝々見つめ

る要藏の、その背後から。「密書の盜賊、拙者の後半生を滅茶くにした憎い奴……」

ハツとする要藏の足下から、猪太郎が苦しい聲で。

「いや、それは俺だ！密書を盗んだのは俺だ兄さんぢやあねえ俺だ」

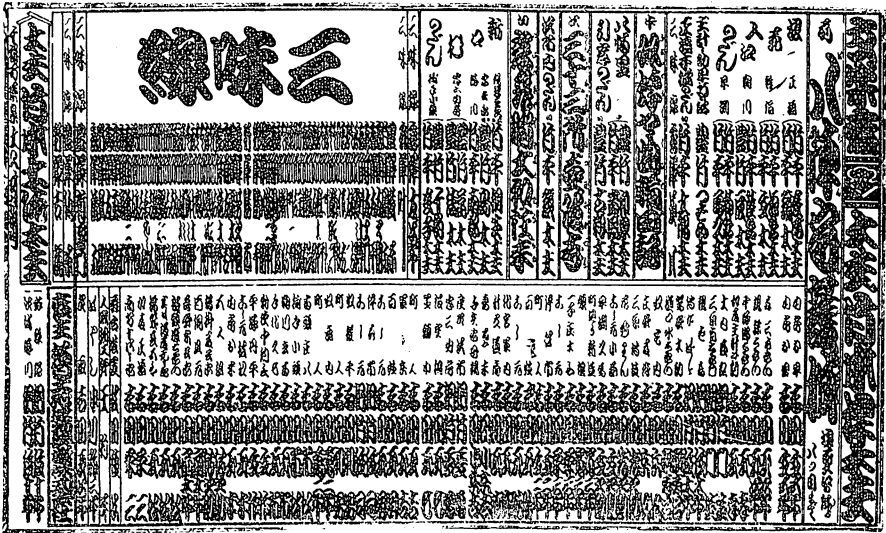
「エツ……」

儀兵衛の言葉で一瞬にそれと信じてゐた、密書を奪つた當人が、要藏でなく、猪太郎だつた事が知れて愕然とする太田點と要藏の前にしらくと、微光が擴がり始めて、遠くかすかに、お喜代の聲を想はせる千守唄が聞えて來る



押切の猪太郎

け野良一



中双蝶々曲輪日記

八幡里引窓の段

中 豊竹和泉太夫
竹本貴鳳太夫

鶴澤 芳之助
鶴澤 清六

切 豊竹古靱太夫
鶴澤 清六

人形

南方十次兵衛 吉田 榮三

女房 お早 吉田文五郎

與兵衛母親 吉田小兵吉

平塚丹平 吉田 文作

三原傳造 吉田光之助

濡髪長五郎 吉田 玉松

八幡里引窓の段

出入や月弓の八幡山崎南興兵衛の
お祖母我子可愛かかねを出せと

謡ひしを思ひ合せば其昔八幡近在隠れなき卿代官の家筋も今は妻のみ生きのこり神と佛を友にして秋の半の放生會、よみや祭りと待宵とかけ荷ふたるそなへもの

母は神細しつらへば嫁は小さいを月代へ子頼みのよねだんご月の數ほど持出るコレ嫁女月見の半はあすの晩けふは待宵殊に日の内からは早い、是はしたりお前があすの放生會をけふからおそなへ遊ばす故何んにもかも宵日からすること、笑止コレ其ヲ、笑止はやつばり廊の詞、大阪の新町で都といふ時は違ふ今では南興兵衛が女房のお早近所の人がきたとたばこ吸付て出しやんなや今でこそ零落たれまへは南方十次兵衛といふて人もうらやむ身體連れ合がお果なされてから興兵衛が放埒卿代官の役目もあがり内證も仕もつれこなたの手前も恥かしい事だらけ、きりながら此處の殿様もおかはりなされ新代官は皆あがり古代官の筋目をお尋ねにて興兵衛も俄のお召し替にかへるは此時と難行なれども神いさめの供へもの蚤の息が天とやらお上の首

尾が聞きたいのイヤモウそれはお氣遣遊ばす
なのおまへの其お心が通じて御出世でござりま
しよ早ふ吉左右開けしましたやと待兼見やる
表の方編笠にて顔かくし世を忍ぶ身の後や先
見廻し立寄る門の口辱しや爰じやとずつと入
る母は見るよりヤア長五郎が母者人濡髪様か
都殿是はしたり扱は願ひの通り興兵衛殿と夫
婦に成つてかマア悦んで下さんせ、わしを請
出した権九郎は根が厭銀仕で牢へ入る、殺さ
れたたいと持は盗人のうはまへ取りで追刺に
成つて殺し徳、何んの氣がいらなう添うて居
やんすハテ仕合せな事同じ人を殺しても運の
よいのと悪いのとハテ仕合せな事じやのイヤ
コレおはやしみるゝとした咄しじやがそなた
衆は近付かアイ曲輪でのお近付あの興兵衛も
かイヤ是はつる一と目知る人じやが又長五郎
様がお前を母様とおつしやる譯はへ、ふし
ぎなは道理くどふで一度はいはねばならぬ
この長五郎は五つの時養子にやつてわしは此
家へ嫁入、興兵衛は先妻の子でわしとはなき
ぬ仲故に其譯しても知らぬ顔あそこや爰の
手前を思ひかつつ音信もせなんだが去年開
帳参りにふと大阪で見付年たけても、てゝご
の譲りの高嶺の黒志もしそなたは長右衛門殿

へやつた長五郎ではないかと問ひつとはれつ
昔語り養子の親達も死失相撲取になつた咄し
歸つて興兵衛に咄さうかと思ふたれど以前を
したひ尋ねてもいたかと思はれるが恥しさに
隠しては居たがからうしられて来たからは戻ら
れたら引合し兄弟の、孟おはずからず嫁共
に子三人わし程果報な身の上はまたと世界に
有るまいと悦ぶ親の心根を思ひやる程長五郎
あすをも知れぬ我命としられぬ母のいたはし
やと思へばせきける涙をかくしイヤ申し母者
人興兵衛殿がお歸り有らふと拙者がことお咄
し御無用なせゝイヤ相撲取と申す者は人を
投げたりほつたり喧嘩同然勝負の遺恨によつ
て待ても町人でも切つて切まくりぶち
殺してマアそんな事私に致しませねど男を達
過ごして一家一門へなんぎのかゝる事も有る
ものまあ此商賣仕廻まではおまへともあかの
他人、倅持つたと思し召して下さるなん時
しれぬ身の上はお別れにならふも知れずお
はや殿興兵衛殿へも母の事頼みまするといふ
て下され長崎の相撲に下りますすればながお
目にかゝりますまい随分御息災でおくらしと
打しほればヤレそんな商賣せいで叶はぬか長
崎へもどつこへもいかずと此内に居て興兵衛

と俱に問談合其恰村では何さしたと仕かね
はせまいノウおはやすふでござりますとも御
兄弟といふ事ぬしも聞ましたら悦ばれましよ
マアお茶漬でもナお袋様イヤ初めて来た
もの鱈でもしませう、あのからだは牛蒡の
大煮鮎の料理が好きで有る、氣が晴れてよい
二階座敷遊川を見て着にして一つ呑みやうぢ
ん、せずといきやいのどりや拵よとまな板や
薄双の錯は身より死出の立立ちの料理ぞと
思へばいと胸ふさがり申し何んにもお構ひ
なくともかけ碗で一つ盃切ついたべて歸りま
しよと母の手盛を牢ぶちと思ひ諦めたばこぼ
んさげて二階へしほれ行人の出世は時知ら
ず見出しに預かり南興兵衛衣類大小申請件ふ
武士は何者か所見なれぬ血氣の兩人家來も其
身も立とまり是が貴公の御宿所となイヤ御
案内お先へ互に辭儀合ひ南興兵衛いそゝ
として内へ入母者人女房只今歸つたヤアお歸
りか戻りやつたかお上の首尾はどふじやの
くお悦びなされ極上ソレハ嬉しい、則ち
此如く衣類大小下し置かれ名も十次兵衛と親
の名に改め下され昔の通り庄屋代官を仰付け
られ七ヶ村の支配ヤレ、それは目出度い事
ム見れば表にお歴々が見へるがありやマアど

なたそあれは西國方のお侍密々に仰せ合さるゝ事有て御同道さして隠す程の事ではなけれど暫らく母人も御遠慮女房も用事有る迄差控へよと言ひ渡し表へ出れば嫁姑今からは武士付合遠慮が多いと物馴し母と嫁とは立別れ奥と口とへ入りにけりイザお通りと二人の武士を上座へ押直し今日殿の御前にて仰付けられし密の御用仔細は各方に承はれとの儀先其お尋ね者の科の様子お物語りと尋ねれば年がさなる侍取あへず拙者は平岡丹平是成は三原傳藏と申て主人の名はお上にもよく御存知、當春大阪表にて二人の同名ともを殺され方々と詮議いたせど討たる相手行衛知れず此間承はれば此八幡近在に由縁有つて立越たと申、去るによつて當役所へお頼み申せしに兄弟の離れ分見つけ召捕れよ、併し夜に入ては當地不案内所に馴たる者に申付纏かけ渡さんと有つてソレナ貴殿へ仰せ付られた仔細と申すは斯の通りと語るを一間に母親が耳そば立つればこなたには女房お早が立聞き虫が知らずか胸騒ぎ興兵衛は何んの心も付かず然らば敵討同然穩密くも左様の儀も有らふかと母女房迄退け御内意を承はる何んと其討たれさつしやつた御同名はな身が弟は

郷左衛門、手前が兄は有右衛門アノ平岡郷左右衛門三原有右衛門とな、いかにもフムウ御存知かなイヤ承はつた様にもム、して其殺したる者は何者サア其相手が相撲仲間て隠れもなき濡髪長の長五郎と聞いて母親障子をびつしやり、おはやは運ぶ茶碗をぐはつたりハテ不調法なと呵る夫の傍に座し猶も様子を聞きたるシテ御兩所は何國を先此丹平は當所を家捜しが致したい御尤も傳藏殿には思召寄は何と、手前が存するには最前其元へお頼み申た繪姿を村々へくばり置き油斷の體に見せどかんくと踏込牛部屋柴部屋或はコウ二階などを吟味致したいて……夫も尤もア、大きな體下家にはおりますまい、どかく二階か心元ない、先御兩所は桶葉、桶本の邊を御詮議なされ夜に入らば拙者が請取奪へ相撲取でござらふがやはら取でござらふが見付次第に纏ぶつてお渡し申さん其段そつ共ヤレ其詞を聞いて安堵くイヤ丹平殿桶葉邊へ参らふか、いか様目の内は随分我々御き夜に入つてお頼み申すが肝心早お暇然らば又晩程役所にて御意得ませう左様くと目禮し二人の武士は立歸るおはやは始終もの案じさしうつむいてゐたりしが申與兵衛様あちな事を頼

まれなされ長五郎とやらを捕つて出せうとの請合はそりやマアおまほんの氣かハテけふと物の言ひ様の侍に由縁もなく元より長五郎に遺越もなけれど今の兩人が願ひによつてお上より此興兵衛に仰付けられた其仔細はア、彼の關口流の一手も覺ゆる事お聞及び有つてやナニ役人共に申付ける筈なれ共當所へ來て間もなく不案内住馴た其方に申付ける日の中はあの方よく詮議せん夜に入つては此方よりすみ、詮議し何卒擲め捕て渡せ國の譽と有つてのお頼みイヤモ一生の外間召捕て手柄の程を見せたらば母人にも嘸お悦びイエくく何のそれが嬉しからふぞ、なせハテ昔はとも有れきのふけふ迄は八幡の町の町人生兵法大疵の基ひよつとおけがでもなきれた時はお袋様の悲しみ何のおけびでござんせふイヤいらざる女の差出、わりや手柄の先をやるかハテ折も一つはお前の爲、ヤアこいつが、何で濡髪をかばひ立て但しは儂が一門か何にもせよ御前で請合見出しに合つた此興兵衛今迄とは違ふ調かへさば手は見せぬときつば廻せば、ヤレ夫婦の争ひ無必要と母は一問を立出最前からの様子變らずあれにて聞きた、何んと其濡髪の長五郎といふ者そなた

よふ見知つてかサレバ一度瀬江の相撲で見受
其後色里にてちよつとの出合イヤモ隠れもな
い大前髪たしか右の高頬にほくる見知らぬ者
も有らふと有つて村々へ配る人相替コレ御覽
なされと懐中より出して見せたる姿繪をどれ
と見る母二階より覗く長五郎手水鉢に姿が寫
ると知らず目早き興兵衛が水鏡きつと見付け
て見上げるをさときおはやが引怒びつしやり内
は真夜となりけるこりや何とする女房ハテ
雨もぼろつく最早日の暮灯をともして上ませ
ふムウハテナはてな面白く日暮たれ
ば興兵衛が役忍びおるお尋ね者イデ召捕んと
すつくと立ちそれまだ日が高いと引怒ぐはら
り明けて言はれぬ女房の心づかひぞせつなけ
れ、母は手箱に咄みし銀一包取出し是はコレ
御坊へ差上永代經をよんでもらひ未來を助か
らうふと思ふ大切な銀なれ共手放す心を推量
して何と其繪姿わしに賣つてたもらぬかムウ
母者人二十年以前に御貨子を大阪へ養子に遣
はされたと聞いたが何と其御子息は今に堅固
でござるかな興兵衛村々へ渡す其繪姿どふぞ
買たいハア、鳥のを粟ひらぶ様に留置かれた
其銀佛へ上ぐる布施物を賣しても此繪姿がお
買なされたいか未來はならくへ沈むとも今の

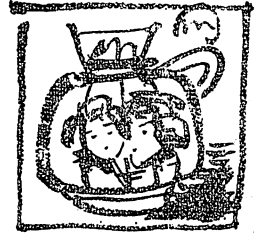
思ひにはかへられぬわいのハアせひもなやと
大小投出し兩腕させば十次兵衛丸ごしなれば
今迄の通りの興兵衛相かはらす八幡の町人商
人の代物お望みならばへ上ませふわいの
賣つて下さるかそれではこなたのアイヤ申し
日の中は私が役目ではござりませぬ、ハア、
忝なやといたゞく母袖はかはかぬ涙の海嫁
は見る眼を押拭ひイヤ申し興兵衛様あんまり
母御様のお心根がいたはしさに大事の手柄を
交へました嗚憎いやつ不届者とお有り有らふ
が産の子よりも大切にかわいがつて下さる御
恩せめてはお力にと俱々に隠しました常々か
ら萬事の品包むと思ふて下さんすなと中に立
身のせつなさを言ひ譯涙に時移り哀れ敷添ふ
暮の鐘くまなき月も待宵の光り移ればや夜に
入れば村々を詮議する我役目ア、河内へ越ゆ
る援道は狐川を左に取右へ渡つて山越に
アよもや夫へは行くまいとそれと知らしてか
け出る情も厚き敷だ、み折から月の雲隔れ忍
びて様子に窺ひ居ることへ兼たる長五郎二階
より飛び降り表をさしてかけ出すを母は抱き
留めヤイラうらたへ者どこへゆくイヤ最前より
尋常に纏にかゝらふと存じたれ共あんまりと
申せばお志の有がたき眼前歎きを見せませ

ふよりは此家を離れてもこたへにこたへて
おりましたが興兵衛殿の手前もあり後よりほ
つ付きとられる覺悟御赦されてとかけ出すを
とつて打すへヤイ爰なものしらずめおれ斗り
か嫁の志興兵衛の情迄無にしおるか罰あた
りめななきぬ仲の心を疑ひ繪姿を買はふと言ひ
かけたは見遁してたもかたもらぬかと胸の
内を聞ふ爲、賣つてくれた其時解しきおりや
後影拜んだん、はやいまだ其上に河内へ
越ゆる援道迄おしへてくれた大恩をおのれや
何と報せうと思ひ居るぞいやいコリヤヤ
イ死ぬる斗りが男ではないぞよ七すちかい親
持つて喧嘩口論人を殺すと云ふ儼な不孝な子
が世に有らふかくると其儘かけ腕に一膳盛と
望んだはおのりや、牢へイヤサ牢へ入る覺
悟じやな、それかどふ見ておられふぞん、せ
めて親への孝行に通れるだけは通れてくれコ
リヤ生られるだけは生ても何の因果で科人
になつた事じやとどうと伏前後不かく泣き
叫ぶおはやも俱にせきのばす涙おさへて申し
泣いてござる所じやないぞ一夜が明くれ
ば放生會で人立が多い今宵の内に落す思案ど
ふぞ姿をかへる仕様は有るまいかな、母が手
づから合せ砥にかゝる思ひの有らふとは神な

らぬ身のしらがの此身剃べき髪は剃もせて祝
ふて落す前髪を涙もんで剃落す老の拳の定
まらずわな／＼震ふて双先がきつくりア、申
二た所迄お顔に疵がア、ひよんなしました幸
ひ血止と硯の墨べつたり付け顔打ながめ大
かたこれて人相がかはつたが肝心の見知り
高類のほぐる剃落さんと剃刀をあて事はあ
てながら是こそはて／＼の譲り篋と思へば嫁
女わしはどふも剃りにくいこなた頼む剃落し
て下され私じや逆むごたらしうそれがどふ剃
らるゝ物、是斗りはお赦しなされて下さりま
せ／＼ア、思へば／＼親の篋で剃落す様に
なつたかエ、心からと言ひながらかはいの
者やと取付いてわつと斗りに泣き洗む折もこ
そ有れ門口より濡髪取つたと打付る銀の手裏
剣高類にびつしやり、はつと身がまへ母はた
ておはやは灯覆ひ今のは慥運合の聲長五郎
様顔のほぐるが潰れたぞへヤアほんに眞に是
も情と母親は表を拜みたりしが兼て覺悟の
長五郎思ひ設けてどつかと座しサア母者人お
前のお手で繩をかけ與兵衛殿へお渡しなされ
て下さりませコレ長五郎様お前は氣がのぼつ
たかとおつたと顔へ打付けてほぐるを消した連合

の心又この打付た銀の包に路銀と書いた一筆
そこにお心付かぬかへイヤ其書付もほぐるを
消した心も骨にこたへ肝に通りあんまり過分
忝なきに母の歎きも御意見も不孝の罪も思
はれずかたわな子が可愛とぎりも法も辨へも
なく助けたい／＼と母人の御慈悲心暫くはお
心休めと詞に隨ひ元服迄致したれ共一人なら
ず二人ならず四人迄殺した科人ア、助かる筋
はござりませぬ、なまかな者の手にかゝら
ふより篋と思ひ母者人泣かず共繩をかけ與兵
衛殿へ手渡ししよてよふお禮をおつしやれやヤ
コレそなふてはこなた未來の十次兵衛殿へ立
ますまいがのア、誤つた長五郎よふいふてく
れたな、いかさま思へばわしは大きな義理し
らず誠をいはい我子を捨てよも縋子に手柄さ
するが人間畜生の皮かぶり猫が子をくわへあ
るくやうに隠しとげふとしたは何事、とても
通れぬ天の綱一世の縁のしぱり繩おはや其ほ
そ引ても取つて下されイヤそれては連合の心
を無になさるゝと申すもの唐天竺へござつて
も此世にさへござればどふしてなりとも又あ
はれる何かはなしに落し下して下さんせ／＼
イヤのふ、一旦かばふたは恩愛今又細かけ渡

すのはなきぬ中の義理晝はかばひ夜は細かけ
晝夜と分ける縋子本の子慈悲も立て義理も立
つ／＼さばのかけの親々への言ひ譯覺悟はよい
か、待兼ねおりまするとおはやを取つて突退
け／＼手廻すれば母親は幸ひ有あふ窓の繩
追取て小手縛り突放せば引繩に窓はふさがれ
心は闇くらき思ひの聲はり上げ濡髪長五郎を
召捕つたぞ十次兵衛は居やらぬか請取つて手
柄に召されと呼ぶ聲に與兵衛はかけ入お手柄
／＼左様なふては叶はぬところとても通れぬ
科人請取つて御前へ引き女房どもも何時さ
れば夜半になりませふがヤアたわけ者めが七
ツ半を最前聞いた時刻がのびると役目があが
る繩先き知らぬ窓の引繩三尺残して切るが古
例目ぶんりやうに是からとすらりと抜いて縛
繩すつかり切りば／＼はら／＼指込む月
に南無三寶夜が明けた身共が役は夜の内斗り
明くれれば則ち放生會生けるを放す所の法恩に
きず共勝手におひきやれハ、はつと悦ぶ嫁姑
あはす兩手のかずよりも九ツの鐘、六ツ聞い
て残る三ツは母への進上拙者が命も御自分へ
それも言はずとさらば／＼さらば／＼の暇乞
別れてこそは落て行く。



第一劇場の業績

豊岡佐一郎

第一劇場は、とにかく一ヶ年間明かな存在を續けて来た。

たしかに批判と期待と興味の對照となつた存在であつた。さうした注視的にあつただけに過去一ヶ年間の歩みには随分苦心の跡が見える。それを清算せよと云ふのが私に與へられた命題だが、清算と云ふものは内部的に行はるべきもので、外部の指圖を待つまでもなく、一步に一步、嚴密な内部清算を経て今日に至つた事は云ふまでもない。勿論その清算が外部のいかなる結果を顯現したが、其處にはまた別個の批判が存在する。

第一劇場が、この寂寞たる關西劇壇に果敢なスタートを切つてからまる一年、當事者の意氣込みもすまじかつたが、我々のかけた期待も大きかつた。第一に、第一劇場の現はれ方が、これまでに革新的意氣を以つて現はれた商業劇團とは、大いに相違してゐた。それだけに期待されるものが尙更大きかつた。では、過去一年間の成績が、その意氣込みを實現し、その期待を満足させたかと云ふに、さう都合よくはいかない。いかにブ

ロムリー中尉の意氣込みが壯烈で、タコマ市民の期待が熱烈でも、どうやら太平洋は一氣には飛べないらしい。

期待に於ては不成裏切られたものがあつたとは云へ、とにかく一年間に三十有餘の新作、十篇餘の初演物を、そのレパートリーに所有してゐる事は、第一劇場の仕事の價値づけるものである。たゞ遺憾とする處は、新作、初演の舞臺的價値が、その統計的價値に及ばなかつた事である。此多くの新作、初演の舞臺から、我々の印象に残るものが、比較的僅少である事は返すくも残念である。今試みに第一回公演から記念公演にいたるまでの三十七篇の戯曲の中から、第一劇場の出し物として——その興行成績は別として——注目に値するものを摘出して見ると、飛ぶ唄、マツ、足輕三左衛門の死、日清戦争、エヂソン、(單なる記念宣傳劇と云ふ勿れ、田中君の脚色物の中でも僕は第一に置いてゐる)、變な村、股旅草鞋、坂崎出羽守、疵高倉人氣投票等がある。併しこの中で舞臺的に成功したものと云つ

てはマツ、日清戦争、エヂソン、變な村、股旅草鞋、少しハン
デイキヤツプをつけて、飛ぶ唄、坂崎出羽、人氣投票と云ふ處
であらう。此外に案外いゝ出来だつたもので、堀川波の鼓、麗
人の二つを擧げる事が出来るだらう。(但し、中山七里、不壞の
白珠、淀君、地震だけは見落したが、或は此中に傑作があつた
かも知れない。

以上は舞臺上の成績を問題として擧げた脚本だが、その他に
單に興行價值から云つて、百パーセントとまではいかなくとも
七八十パーセント位の成績を擧げ得た脚本も二三無い事も無い
が、それは第一劇場の業績批判から除外して差し支へないもの
であらう。

第一劇場として、この成績は、一年間の收穫としては確かに
寂しい感じはするが、一方、關西劇壇に於ける今日までの商業
劇團の爲し得なかつた事を爲し得た點に、第一劇場の業績を認
めるのが至當であらう。

たゞ、此處に再び遺憾の點を表明するならば、第一劇場の仕事
に發展性がなかつた事である。自己清算を行つてゐた事に疑
ひはないが、その清算に發展性が伴はなかつた事は甚だ遺憾で
ある。或はその發展性が未だ内在的なもので、今後に於て發揚
される性質のものかも知れない。今日までの清算が將來の發展
を約束するものである事を切に望んでゐる。

尙も一つ、第一劇場に對する要望を述べて見るならば、第

一劇場がそのスタートに聲明した、第一劇場に與へられた自由
さをもつと有意義に發揮して貰ひたかつた事である。第一劇場
はその座組に於て自由な、有利な立場にあり、脚本によつて適
當な俳優を適時に加盟させて、よりよき舞臺の實現を期する事
を聲明し、事實それを實行して来たが、その聲明がや、羊頭狗
肉の結果となつた事を指摘して、今後に於てその聲明を、より
實質的な内容によつて、實現されん事を希望するものである。

單にポスターパリュエのある俳優の加入によつて演劇以外の興
味によつて觀客の興味を引かんとする策は、演劇第一主義の第
一劇場の取るべき策ではなかつた。これは勿論興行第一主義の
立場からの策には相違ないが、果してそれらの俳優によつて、
(最初の長二郎は例外として)どれだけ興行上の成績を擧げ得
たであらうか。興行上の事に何ら關知しない自分としては、そ
の数字的事實を指摘する事は出来ないが、恐らくは豫期した程
の成績は得られなかつたではないかと思ふ。而も舞臺の上に於
ては何ら壽三郎君の芝居を助けて居ないのである。第一劇場は
何と云つても壽三郎君の第一劇場である。壽三郎君を中心にし
て總ての事が立案計畫されなければいけないと思ふ。だから今
後もフリー・ランス制を採用するなれば、眞に壽三郎君の芝居
を生かし、尙且つ興行的に云つて宣傳價值のある俳優を加入せ
しめた方が遙かに有意義であり、聲明に對して忠實である。

壽三郎君其人が歌舞伎出の新人であり、三十七の上演戯曲の

中十九まで、所謂鬻物である事實からして、歌舞伎畑の新人を（敢て大阪に限る必要はあるまい）加入させた方が遙かに、第一劇場の芝居が面白くなりはしまいか。少なくとも、現在の壽三郎、石川、三好の三重奏にもう一人固定男優を加へて四重奏にした方が、芝居の面白くなる事はたしかである。とに角、第一劇場は關西に於ける存在権を主張し得る唯一の劇團である。その存在をより明確に！

（一九頁よりつづく）

牡丹のやうに華やかな人々が秋草のやうな姿を見せて忘れられて行く。思へば舞臺俳優も又時に一悟なかる可からずだ偉なる哉澤正！

私がセンチメンタルな追想は突發的な、錯念で忽ち掻き消された。澤正の仕事。澤正の死。澤正の最期。澤正の影——。

此場合の私の非人間的な、そして極端なヒロイズミカルを嗤はないでほしい。

俳優は花であつて欲しい。俳優はその舞臺姿の如く、華やかな最期をフアン達の脳裡に想起せしめたい。寂しい蟲の聲に依つて冷たく思ひ出の幻想に泛べられて葬られやうより。より明るくより強く、より深く、生ける者の如く、生けるフアン達の思ひ出の中に輝やかしめたい。

私は俳優を尊崇したい——、それは、その人の最期的如何に依つて。

——音楽堂に於ける「新聲劇の夕」の殺人的なフアンの大衆群を脱れて歸りし夜之を記す——

大野醫學博士 實験推選
乳兒に一番良
パルムオイル
松竹石鹸

退却復退却

森田信義

忌憚なく云ふ。第一劇場は一步退却、更にまた一步退却、唯もう出来得る限り隊形を潰さないことを努めながら、退却をつけてゐるに過ぎない。

一年前の創建當時にか、けたスローガンは、どうした。——「演劇的インテリを揚棄する」と云ひ「大衆との握手」と云つたのは——彼のこの一年間の歩みの何處に、思想、趣味を内容とする時代生活との契結が發見されるか。

それもよし、もし何らかの必要上——所詮が商賣コンマーシヤリズム劇團である以上、その立前の上から——方針轉換をやむなしとしたとならば。

が、臆、そこにはそれでもないではないか。發見されるは、無方針、無成算、それだけではないか。小さな思ひつきを常套手段とすることではないか。やりくりではないか。その日ぐらしではないか。一體全體、どうしたと云ふのだ。

更にもう一つ、あの無氣力さはどうだ。當初のあの激刺とした意氣込みはどうしたのだ。かくて、遂に現在、最後の陣地——陣地とたのむには、あまりに脆弱過ぎる——にまで、後退したではないか。危機だ、まさに——實に遺憾、關西劇壇の指導的立場にある演出者を有ち、殆んど唯一の實力ある俳優を主班とする第一劇場にして、この惨めさはどうだ。

奮起せよ、第一劇場、攻勢に轉ずるに、残された唯一の機會は現在だ。と云ふ意味は、此處で勇猛心を振ひ起さねば、危機は、それ以上のものにまで發展するであらうと云ふのだ。君の脆弱な最後の陣地は、さう長く持ちこたへることは出来ない。そして、此の陣地の崩壊は即ち……

攻勢移轉、それだけが残された全部だ。前進！必要なのは勇氣だ。今日までの一切を揚棄して、方針を再建確立せよ。目標を正確に認めて、一途に前進せよ。切に望む。

照明機械器具製作
特別電氣工事請負
電飾點滅設計出願建設

ト一キ一工事専門



岡本電機工業所

大阪市天王寺區生玉町三番地
電話 南三六九二番



鷹治郎の藝術

富田泰彦

歌舞伎と共に尊重せよ

「道頓堀」の編輯者から「鷹治郎と梅忠」に就て、何か書けとの注文なのです——だが今更鷹次郎禮讃論や、「梅忠」研究でも御座いますまい。鷹治郎が、如何にして不世出の名優であり現代劇界の最高峰にあるかに就ては、私は既に本誌を通じて、前後十數度に涉つて、所謂「私達の鷹治郎」觀を試みた積りなのです。

私は先輩石割松太郎氏からお叱りを受けてゐる「大阪の新聞劇評家中の唯一の歌舞伎耽美者、大阪劇壇現状支持論者」であるが故に「不世出の名優鷹治郎の健在なる」を謳歌する理由をハツキリして置きたいと思ひます。——一體大阪劇壇の支配權は誰にあるとお思ひですか、這般の消息に通曉しすぎてる石割氏にして、敢て異議を立てられることは、徒らな見解と見ね

ばなりません。若し一つの理想としての若手起用論なり、歌舞伎の新作は大に振興すべきである」には、双手を舉げて賛成すべきでありながら、何うも實現性には乏しいのを遺憾とします

一體歌舞伎の生命は、何處にあるか——今後幾年かを持続すべきか、勿論未知數ではあるが、私は鷹治郎の如き名優の健在なる間は滅びないことを固く信じてゐます。

由來我國歌舞伎の發達は、その名優の輩出にあつたと思ひます。その狂言も、その演技も、その座組も、悉くはスターシステムに依つて、傳統されたものです。——歌舞伎は、その脚本を見るよりも、役者を見ると云ふ點に、興行政策からしても——其處に重點が置かれてゐたと思ひます。俳優に對する魅惑は劇場經營の人氣の消長その他に打算化されたものです。

白井社長が、大阪劇場——否「歌舞伎國」の全天下を、掌握しつゝ、ある以上、猶舞臺の魅惑を失はざる、鴈治郎中心主義の陣容を樹てられることは、最も賢明であり、安全な行方だと思ひます。斯くてこそ、私達が見果てぬ歌舞伎の夢を耽美し得られるのです。——でもそれは幾年續くことやら……

歌舞伎は飽迄古典尊重でありたい。「梅忠」でも「勸進帳」でも、「壇特山」でも可い。——歌舞伎のイデオロギーを云々し文學的に批判しようと思ふことは、大なる偏見であり、脱線も甚だしいと思ひます。近松の名作「梅川忠兵衛冥途飛脚」が、舞臺の「戀飛脚大和往來」と、それはたとへ韻文から散文化されてはゐるとしても、その主題に於ては、既に近代人にはうけ容れられないものがある筈です。——それなのに何故、何故、——昭和の今日まで、上演價值のある所以のものは何か——

云ふまでもなく、名優鴈治郎の魅惑であり、演技の力です。「ヘンちよつとやそつとお粗末ながら梶原源太は……」彼の舞臺の色氣は、連も現代的な生々しいエロとか、八八とかとは比較し得ない潤ひを感じない人は何處にあるでせうか、——藝術至上主義などと難かしくは申しませんが、鴈治郎の一舉手一投足が、鴈治郎が梅忠か、梅忠が鴈治郎かと思はす處に、歌舞伎の醍醐味がある譯なのです。

「役者は一文高——」とか申します。鴈治郎ほどの梅忠を——その滋味ある舞臺を、今の若手の誰が再生し得ませうか、横綱の相撲も、取的の相撲も、相撲は相撲に違ひはないと云つて終へば、また何をか云はんやです。——況して羽左衛門にも菊五郎にも、その他大阪俳優中から鴈治郎ほどの「梅忠」を求め得ないと云ふ處に、初めて天下一品の賞祿が備はるのです。

歌舞伎の幻想——それは恰度一瞬の果敢なさに消えて終ふ花火の美です。歌舞伎の耽美論者の夢は、その果敢なさを追ふラメントです。

新興藝術は排撃しようとは云はぬ。——だが新しく芽生え生長して行く未来を持つもの、生命よりも、今やその究極にある——斷末魔にひとしい——譬はど燈明のまさに消えんとする刹那の輝きを見せた現代の歌舞伎に——老名優の至藝に、もつと敬虔な國民的な愛護心が望ましいものだと思ひます。——斯くてこそ我が古典歌舞伎は鑑賞するよりも、詠歎すべき運命の日に近づきつゝあることを忘れてはなりません。歌舞伎のエロテイシズムや、グロテスク——若しくは舞臺のテロだと云ふ立廻りの美などは、此儘、永劫の「感激の世界」へ封じ込めようとする國劇への反逆者の日一日と増加して行くことを呪ひます。

彼の煩はしい外來思想などが侵入しなかつた頃の、歌舞伎の生命を、そのまゝ凝と今が今まで把持して來たのは、藤治郎達の名優の力ではないと誰か否定出來ませう。歌舞伎の衰亡論も可成り久しい、それなのに忍耐強く——今日どころか「明日への期待」を繋がれてゐる不思議な存在としての歌舞伎も、所詮は藤治郎の如き統制者がある故に崩壊しないのである——そして歌舞伎の大に振興すべき新作をも翹望されるのではありますまいか。

「温故知新」——など云ふ言葉を持ち出すまでもありません、新しい藝術も、古い殻の中に醗酵されて行かねばなりません。お國歌舞伎に端を發して、若衆、野郎の所謂猿若狂言の根元に溯るまでもなく、系統的に盛衰消長の跡を、考察して見ましても依つて來るべき起因が、それらの楔となつてゐます。左近源左衛門が女形の始まりであり、市村竹之丞と玉川主膳が相座して、その女形を交へた二番つき、三番つきの狂言が寛永四年に出た記録などの證索をしようと思ふのはありません。たゞ上方狂言は、傾城買ひのしぐさに始まり、名人坂田藤十郎の人氣など、こゝに説くまでもありません。斯くてこそ「梅忠」なども、この傾城買ひの技巧の一つであり、藤十郎以上の名人としての藤治郎の和事に、陶醉し得ない人は何處にありませう

か——こゝに於て歌舞伎は傳統藝術としての古典を、飽迄尊重して可いと云ふ議論が成り立つ譯であり、藤治郎の如きその典型的な俳優に、新作物を強うることは、あやまつてゐると思ひます。——藤治郎は今後、その得意の狂言を次々に上演して行けば可い、そしてその型を後世に傳ふべきであり、それをアレンジすることは、その時代の名優の出現に俟たねばなりません

市川小團次は、默阿彌と共に寫實を賣ふ世話狂言を生んだ。市川團十郎は、福地櫻痴などと共に所謂活歴なるものを創造した。——しかし舞臺に醸し出される處の、エモーション(情緒)と云ふものは決して無視してはゐませんでした。歌舞伎の生命は實にその情感であるからです。

忠兵衛は何故、八右衛門如き者の、惡たいを聞いて大切な封印を切らねばならないか、それほど好きなら梅川なら——梅川もだ金廻りの可い八右衛門に、一時落籍させて、直ぐ忠兵衛の許へ走れば何うなる。戀愛の自由性は認められてゐない時代であるとしても、今日の眼からは、しかく解決するのは妥當ではありますまいか——だがそれでは折角の歌舞伎の美しい情操が、こはれて終ひます。

其處で矢張り「親父様から小道にせいと送つて來た三百兩、

しが物で俺が使ふに、誰に遠慮があるものか「忠兵衛が人様に損かけぬ證據を、よう見て置けッ」と極り、「氣をもみじ傘白張り……」の下座の合方になり「五十兩ッ、百兩ッ、百五十兩ッ二百兩ッ……エイッ、ビビ吃驚すな！八右衛門、未だあるわい——」と来てこそ芝居となるのです、洗練に洗練を経た鷹治郎の技巧も、この邊を最高潮として、満場の観客を恍惚たらしむるのです。

歌舞伎に理窟を云ふほどの野暮はありません。たゞ舞臺技巧を賞美すれば可いのです。さうして役者を見るのが本位なのです。鷹治郎の忠兵衛は勿論、魁車の梅川にしても、福助のおえんにしても、これほどに役者と意氣の合つた舞臺は、ちよつと他にはありません。

私は、いつも云ふことですが、斯うした歌舞伎も、今のうちに進んで見て置かないと、後に取りかへしのつかぬ損をするやうな氣がしてなりません。「事後の思慮は愚人の思慮」——と申し申します。鷹治郎の至藝の味を知ることの誇りをお互に持つてゐるようぢやありませんか——いつくまで。

(一九三〇、八、三二)

第一 質品
ルビンリキ

總用御省內宮
社會式株酒麥麟麒

芝居

岡田嘉子が廿二日より二週間に涉り、松竹座に於て久々出演、前一週間が「女優」で後の一週間は名曲「道頓堀行進曲」道頓堀四度目上演で満都のファンを熱狂させる

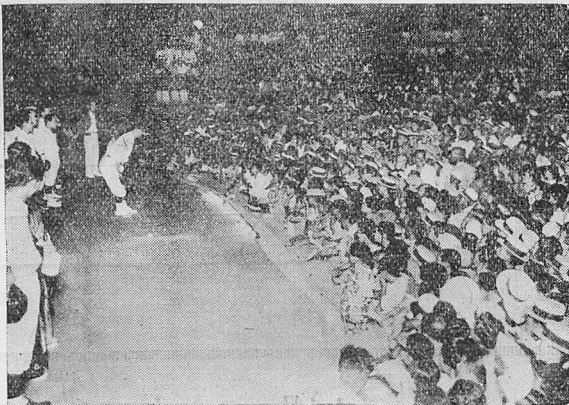
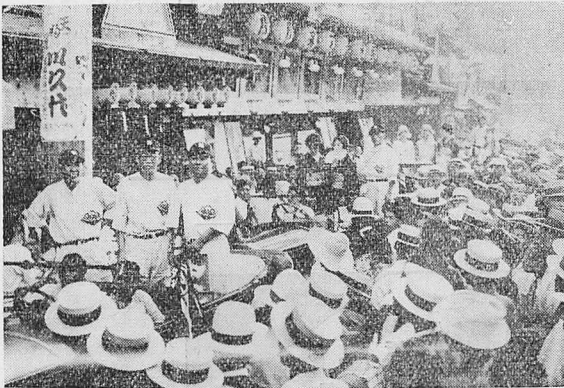


いつに演實の篤邊渡・子澄島栗
 阪來が枝舞田龍花名の田蒲で
 竹松間週一でま日四十りよ日八
 嬢場上を「盜強教説の愛」で座



迎出てに着田梅時八前午日七は
 花てれさ擁に臺數十車動自のへ
 む入り乗くし々

ん氣意の新の携是願巨四の川伊・口山・野辻・田中
 天、前を日初の行興月九、日十三月八、は劇聲新な
 座、は座一日當たつ演を劇外野、て於に堂樂音園公寺
 一を所場の抜一目内市てし乗分に車動自の臺餘十二合集に
 たつやをみ込乗いし々花てし巡



更新新聲劇が三十日午後六時半より
 天王寺公演音楽堂に於て野外劇舉行
 殺人的人氣にて滿庭立錫の餘地なき
 盛觀を呈し、一座は開會劈頭に挨拶
 をする………

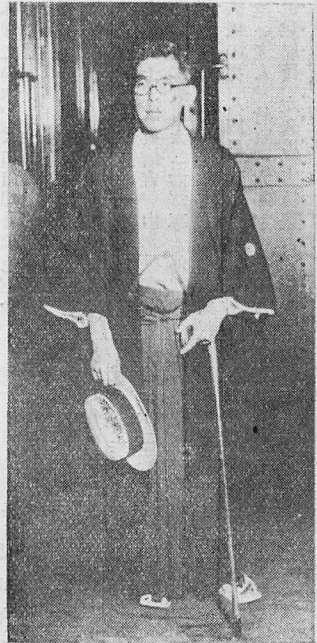


ハはーユヴレ大竹松たし博を賛絶てに演出場劇京東月七
九演歸堀頓道の々久に茲は徒生女部劇樂に更演出戸神月
「女と海と夏」スンセンナの邊海の産土京東りよ日四月
演公を「ユジユジ箱具玩」

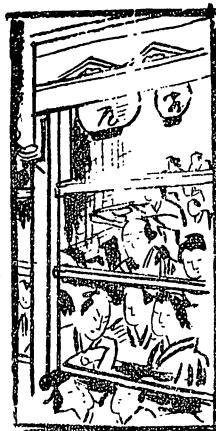
中座九月興行「一の谷」「双
面」「幡隨長兵衛」上場に因
み道頓堀前茶屋には雅ひな繪
行燈をかゝげた
初秋の芝居街を彩る繪行燈は
道行く人の足をとめてゐる
寫眞は、陣屋の熊谷の繪行燈
に親しむ中村吉右衛門



は伎舞歌大京東行興月九座中
座一門衛右吉村中のり振年五
初日二てに同合郎十宗村澤と



午日一卅月八は門衛右吉、日
着田梅分二十四時八後



劇壇往來

當る九月興行

東京大歌舞伎

中座
二日 初日
毎日午後四時開幕

【狂言】壹番目「一谷嫩軍記」貳幕・中幕
 「双面水照月」常磐津連中・貳番目河竹默阿彌作 極附 幡隨院長兵衛 三幕

【役割】熊谷次郎直實、幡隨院長兵衛（吉右衛門）息女玉織姫、妻相模、渡し守おしづ、長兵衛女房お時（時藏）平山武者所、坂田金左衛門、出尻清兵衛、三浦小次郎（吉之丞）火繩賣新吉、碓水貞五郎（若猿）下女およし（秀世）こし元おつき（柏州）源頼義、地藏の三吉（梅笑）頼義の御臺所、腰元おはつ（辰之丞）慢容上人、雷重五郎（七三郎）駿河次郎、神田の彌吉（又五郎）娘おくみ（も

しほ）堤軍次、坂田公平、近藤登之助（九藏）彌陀六實（彌平兵衛宗清、水野十郎左衛門（及右衛門）遠見の熊谷次郎直實、伴長松廣太郎、片岡八郎、保昌武者之助（力藏）伊勢三郎、渡邊綱九郎、膝守剛六（紫若）龜井六郎、閻魔の大助（淀五郎）梶原平次景高、舞臺番新吉、小佛小兵衛（金五郎）横山助十郎（連倉）藤之方、吉田の松若、極樂十三（田之助）熊谷小次郎直家、無官大夫敦盛、源義經、野分姫の靈、唐大權兵衛（宗十郎）

新喜劇

竹松家庭劇

浪花座進出興行
九月一日 初日 晝正午 二回開演
夜五時半 二回開演

【狂言】第一、中野實作「三ツの旅」一場、第二、茂林寺文福作、大和田想外脚色、金儲け虎の巻「千客萬來」三場、第三高砂住人作「結婚第二夜」一場、第四、川竹五十郎作「嶺の出来事」一場、第五、茂林寺文福作篠崎謹「脚色」山芋が鱧に二場

【配役】青年紳士、店員信吉、山駕榮吉、岩見邦雄（天外）工夫市太（三郎）専太郎友人市田、一郎）工夫清次、店員政吉（鐵彌）店員定吉、女衞風の男（八四呂）通行の男（一富士）耳の遠い老人、竹原豊太郎、工夫勇吉（十次郎）電氣局員（左久馬）店員豊吉、郵便

更生

新聲劇

九月一日 初日
毎日 晝正午 二回開演
夜五時半 二回開演

【狂言】第一、島田宏一郎作、都會曝露「誘惑時代」二幕三場、第二、サンデー毎日所載「行友李風原作、徳田純宏脚色、巷説」化鳥地獄三幕八場

【配役】要藏の弟猪太郎（辻野）紳士大塚、下總屋藤兵衛（新田）岡つ引布屋甚五郎（小波）達也の弟達夫、長州藩士河田（吉田）長州藩士渡邊（松井）木島達也、長州藩士鶴澤貞二郎（伊川）素晴らしきブルヂョア、番頭

呂久助(武澤)裁く人、長州藩士棟村(山本) 嬢の儀兵衛(芝田)刑事井上、船頭彌六(藤本) 太田黒貞(中田)ダンサーみさを(和歌浦) 達也の妻禿子(音地)お源(中村)ダンサー マネ子、津之庄の娘お綾(福岡)ダンサー 蘭子(富士岡)ダンサーヒトミ、女中おきよ (金剛)裁かれる人(澤井)要蔵の情婦お喜代 お喜代の妹お妻(富士野)熊谷要蔵(山口)

文樂座人形淨瑠璃

新秋特別興行

九月一日初日 毎日午後四時開幕

【狂言】前「八陣守護城 浪花入江の段より正清本城の段まで、中「双蝶々曲輪日記」八幡引窓の段、次「三十三所壺坂寺」澤市内の段、切「戀飛脚大和往來」新口村の段

【役割】前浪花入江の段||正清(長尾太夫、鏡太夫)雛絹(源路太夫、文太夫)鞠川(陸路太夫、辰太夫)早淵(播磨太夫、龜久太夫)糸(綱右衛門、猿太郎)琴(團二郎、勝之助)主計之助早打の段||つばめの太夫、(澤市)正清本城の段||大隅太夫、道八)中、八幡里引窓の段||中(和泉太夫、貴鳳太夫)(團六、芳之助)切(古鞆太夫、清六)次、澤市内のどん||切(鏡太夫、新左衛門)ツレ(友衛門、寛市)切、新口村のどん||親孫右衛

門、忠兵衛、毎日替りにて(相生太夫、島太夫、梅川(南部)太夫、忠三女房(富太夫、綾太夫) 捕手小頭、千駒太夫、長子太夫)糸(吉彌)

【人形割】浪花入江の段||加藤正清(榮三)嫁雛絹(紋十郎)早淵久馬、文之助)鞠川玄蕃(玉市)主計之助早打の段||大内義弘(門造)鞠川玄蕃(玉市)妻葉末(小兵吉)船頭灘右衛門(玉松)加藤主計之助(玉幸)正清本城の段||加藤主計之助(玉幸)嫁雛絹(紋十郎)妻葉末(小兵吉)加藤正清(榮三)鞠川玄蕃(玉市)後室柵(玉七)船頭権右衛門、實へ後藤元兵衛(玉松)大内義弘(門造)引窓の段||南方十次兵衛(榮三)女房お早(文五郎)與兵衛母親(小兵吉)平塚丹平(文作)三原傳造(光之助)濡髮長五郎(玉松)澤市内の段||座頭澤市(政龜)女房お里(文五郎)觀世音(紋太郎)新口村の段||龜屋忠兵衛(扇太郎)傾城梅川(紋十郎)忠三女房(政龜)樋口水右衛門(飄壽呂)傳がば、(紋太郎)置頭布(玉七)鶴澤藤兵衛(傳之助)捕手小頭(市松)親孫右衛門(玉次郎)

笑ひの家 四の替り

田宮貞樂一座

八月三十一日初日 毎日晝正午二回開演 夜五時半

【狂言】第一、草路夕歌作「好一對」二幕、

第二、村井幹郎作「飛込んだモガ」一幕、第三、兼平貞夫作「めくら編」三幕、第四、兼平貞平作「一夜の情」二幕、第五、むらく作「たと」一話二場

【配役】會社員吉岡、琴曲師匠青山、植木師金三郎、貸本屋文化堂(貞樂)社長大澤、父由兵衛、金貨金森(九貞樂)若者源公、友入加納、村木アロオ、弟子三吉、仲仕虎吉(喜鶴)母親お卷、母お幹、仲仕頭友吉(樂笑)、お秋の夫豊吉(喜貞也)息子次郎三郎、仲仕竹公(美貞也)妻春子、金三郎女房おふさ(喜千哉)モガ、ミスジユ、許婚の娘お節、金森の妾お秀(喜扇)仲居お辰、大澤の妻杉子、女房お常、妻お爲(喜貞也)出入の親方淀吉、隣の男助藏(喜久三)

第一劇場

九月興行

一 日 初日 毎日午後五時開幕

【狂言】第一、神田榮一作「女郎蜘蛛」三幕 九場、森寛次郎装置、第二、門脇陽一郎作 並舞臺監督「戀愛風景」二幕三場、大塚克三 装置、第三、田中總一郎作「累物語」三幕六 場、森寛次郎装置、村田芳生照明 【配役】田島町の龜吉、與右衛門(壽三郎) 源七女房お里、太平次女房お辨(三好)水茶

九 月 の 劇 壇

屋の女お芳、小間使ひお幸、おうみ(浪花)娘お春、お淵(六條)水茶屋の女お君、小間使ひお福、久助の女房(香取)女賊お絹上千枝子、累(石河)小間物屋清次郎、次男武郎(高田)巾着切吉五郎、學生住吉、名主助作、毒虫の八藏(進藤)、寺男作兵衛(豊之助)猿の紋次、片山文三、上總屋熊吉、渡し守太平次(山田)一人芝居の男、敷蚊の文太(橋十郎)岡部三十郎、長男達郎、久助(元安)澁川良平、龜吉の父源七、金五郎(藤村)令嬢銀子(歌川)

志賀迺家淡海劇

京都座
九月一日初日
毎日晝夜二回開幕

【狂言】第一、村田和男作「妻征秘訣」二場 第二壽賀稻里作「反響」二場、第三、恵川重作「暴風雨」五場、第四、石橋和作、ナンゼンスコメデー「打出の小槌」三場
【配役】松田の母親おらく、妻政子、職工孝吉(龜鶴)お静の父大橋三平、松造の父源兵衛(辨慶)岡村の妻邦子、職工平助(白石)伊藤俊作、縫子の兄辰夫、職工晋造(歸帆)外山善雄、松澤謙吉(十太郎)叔父久兵衛、土方彌市(太郎)伊藤の妻美子、鈴木の娘縫子(辨天)野部の妻雪子、由太郎の妻おしづ婚約者佐々木葉子(かもめ)仲人磯谷直造、鈴木慶三、長屋の男根山(源五郎)松造の女

房お淺、岡村直治、番頭重助(樂太)主人松田由太郎、息子謙一、土方松造(淡海)

東西合同大歌舞伎

九月一日より巡業

一日—五日(名古屋) 御園座
六日—七日(津) 曙座
九日—十日(廣島) 辨天座
十二日—十三日(下ノ關) 勝山劇場
十五日—十六日(久留米) 惠比須座
十八日—十九日(小倉) 松竹劇場
廿一日—廿七日(神戸)

【狂言】一番目「武勇譽出世景清」一幕、中幕「櫛屋おせん」一幕、歌舞伎十八番の内「勸進帳」一幕、二番目「戀飛脚大和往來」封印切の場、大喜利櫻痴居士作二人袴「常磐津連中、長唄連中」

【配役】富樫左衛門、龜屋忠兵衛(鷹治郎)右幕下頼朝、女房おせん、源判官義經、井筒屋おえん(福助)美保の谷四郎國俊、麴屋長左衛門、子息右馬之助(長三郎)麴屋女房おさが、龜井六郎、住吉左衛門(吉三郎)伊勢三郎、妻老松、駒之助(近所の女房おろく)遣り手おたつ(成笑)豊島兵衛長成、近所の女房おさき(成三郎)足立太郎時敏、糸屋の息子新吉、女郎鳴渡瀬(扇)太刀持、女郎喜代川(鷹之助)景清娘人丸實(重盛)の娘、娘

お君、娘雛鶴(成太郎)美濃屋喜三郎片岡八郎、家來鈍太郎(政治郎)山口兵衛次郎直定麴屋下女おくめ、仲居おはつ(魁重)平三景時、番卒源内(錦四郎)平子右馬允重宗(後見(大七)小さん)景、番卒久七(肝入)由兵衛(齋五郎)梶原平次景高、鉾屋久七(肝入)由兵衛、常陸坊海尊(九團次)番卒軍内丹波屋八右衛門(箱登羅)畠山庄司重忠、櫛屋伊助、榎屋梅川(魁車)惡七兵衛景清、武藏坊辨慶、榎屋治右衛門、高砂尉兵衛(幸四郎)

關西花形大歌舞伎

九月一日より九州地方巡業

【狂言】一番目「五大力戀誠」二幕、中幕「梶原平三試名劍」星合寺の場、二番目大森痴雪新作宿なし團七「三幕、大喜利所作事」鞘當「長唄連中」

【配役】勝間源五兵衛、梶原平三景時、團七の茂兵衛、大鼓持扇八(扇雀)若徒八右衛門、伊野五郎景久、岩井風呂のお富鶴鶴組山三郎實(名古屋元春(霞仙)于島萬太郎、華者お咲、娘梢、女中お千代(卯之助)飛いち、囚人呑助、秀文彌(延太郎)富田屋お脚正平太、大場三郎景親、男衆久七(右田三郎)蕪者菊野、奴高平、娘お銀(福太郎)笹野三五兵衛、青具師六郎太夫、魚問屋大治、並木正三、稻妻組伴作、實(不破伴左衛門(秀郎)其他

芝居に現はれたる忍術

大澤休象

◇鬼一法眼三略卷

◎菊 畑

享保十六年九月、大阪竹本座上場操淨瑠璃「鬼一法眼三略卷」作者は文耕堂、長谷川千四——一説には竹田出雲といふ。全五段物のうち、三段目の「菊畑」この淨瑠璃が歌舞伎狂言に移されたのは、享保十七年、大阪嵐座が初演である。

鬼一法眼の役は天明三年七月大阪角座で元祖嵐雛助が鬼若丸と大藏郷と鬼一との三役を勤めて以来の當り藝。

異本義經記を抄記すれば、一條堀川に陰陽師鬼一法眼といふ者あり。希代の軍書を有つ。是後醍醐帝延長元年、大江維時、遺唐使として大宋國へ遣はされし時、龍取將軍に逢て傳來の軍書也。黄石公張良に傳る所の兵書と云、後、鞍馬寺へ奉納ありし祕書也。

鬼一、夢想を請奏問を經下し預る。義經之を聞き給ひ甚だ執心し、安元二年二月、平和泉を出給ひ、都一條大藏郷長成朝臣方へ止着有て、後、鬼一法眼方へ來り給ふ。法眼、衣の下に葛

の袴、銀の柄鞘卷きたる刀を差し、女二人に介措せられ座に居り、御曹子を席に招き、詞細やかなりといへ共、兵書を深く秘して出さず。是に依つて義經、法眼の娘と密通して彼の祕書を娘に偷み出させ寫し取り悉く納得す云々。

皆様先刻御存じの名狂言だから前口上は之れ位にして、夫れが本當の忍術といかなる關係があるか、鬼一法眼の戸籍を調べてみると、

◇鬼一の正體

豪雄言行録に、吉岡鬼一(或は歸一)名は憲海、自ら稱して今出川義圓といふ。本貫詳かならず。或は伊豫國吉岡邑の人なりと、人となり、兵學武技に練熟して一家を興す。治承年中京都に來りて堀川に僑居し、軍術、刀法を傳ふ。人推して京流の元祖とし、又、堀川流とも謂へり。家に虎の巻と唱ふる兵書を藏む。相傳ふ大江匡房之を訓閱集に收めたれども備具せず、要とする所は口訣を以て傳ふ。獨り鬼一故ありて皆傳し、之を義經に傳へ、刀法は之を鞍馬の僧八人に授く。故に其流を京八流と謂ふ。義經僧正ケ谷に神人より相授けらると唱へしは其僧を

指すならんと云ふ。(一説、義經鬼一の女に私情を通じ訓閲集を竊抄す。其書鞍馬の僧祐頼より十八傳して、山本勘助相承すと甲賀流の忍術書に、訓閲集といふがあるけれど、それは我邦最初軍學者岡本半助の著した物で、井伊家の秘書となつてゐる。僕は夫れを手寫してあるが別に發表の機もあらうから茲には略すとして、この芝居の重心點は、三略の卷であるから其説明に蒐る。

三略の卷は支那の兵書で、孫子、吳子、司馬法、尉繚子、三略、六韜、太宗問對、乃ち武經七書の中の一で、支那の張良が黄石公から授かつたものであり、上略、中略、下略、周の太公望の述作といふが、まことは僞作であるとの事。しかし此七書は宋の元豐年中に合輯した立派なものである。

そこで稽へてみると、支那に於ける、忍術の大家として、僕は先づ指を、太公望に屈せねばならぬ。孫子といふのは、今を距ること約二千四五十年のむかし、周末敬王の代に現はれた兵術家孫武といふ男の書いたものだが、その著十三篇のうち、最終の用間篇は、忍術を説いたもので、吳の國では忍術者を間といひ、春秋の時代には、諜と稱し、戰國以來、細作、遊偵、姦細等號したものである。

孫子の用間篇に、周の初めて興るや呂牙商に在り、註に曰く呂牙は太公望、商は商王紂也とある。而して太公望は女貨經を紂王に獻つて歡心を買つた。その太公望はほかに忍術の書七十一篇を著はしてゐる。三略の卷は支那隨一の忍術家太公望の著

とされてゐるから先づ鬼一法眼の秘藏してゐた虎の巻といふのは忍術書で、夫れをひそかに偷み讀まうとした義經が又忍術を使つたのだから面白くなつて來る。

◇義經と、くノ一の術

頼朝が石橋山の敗戦に、木通の術を使ひ、義經は文治、高館の窮境に火通の術を以て逃れたと、灌澤馬琴の八犬傳にあるが「菊畑」の義經即ち、牛若丸は、くノ一の術を使つて、三略の卷を偷み讀んだのである。くノ一の術とはいかなる術であるか？ 忍術の秘傳書を閲ると、田力の及ばざる場合は、くノ一の術を用ふべし。と記るされてゐるが、最初夫れを見た時、何の事やら薩張わからなかつた。と註に曰く、くノ一の術とは、くノ一を一つにしたるもの也とあり、ハテナと首を捻つて考へた結果、くノ一を一つにすると、女といふ字になる。ナルホド女を使ふのがくノ一か!!! 又曰く、曾我的兄弟、虎御前や化粧坂の少將や、鶴何とかいふ女と名染んで驍敵を討つたのもくノ一の術也と、合點々々、その術なら、芝居道に關係ある人達は皆、極意を究めて居られる筈。

さて此くノ一の術に就て詳細に書きたいが、秘傳書を見ると〇〇〇ばかり夫れに隠語や符諜が多く、綜合して考へるとエロ百%、若し之れを明らかにすれば直ぐ道頓堀風壞の簾により發賣禁止と來るが必定。

だから遠慮してゴ勝手の想像に任せる方が無難。

次は鼠小僧を描くつもり。

編輯後記

秋だ！清涼の秋です。

絶好の芝居季節に入つて、關西劇壇は、下旬の神戸松竹劇場の成駒家、高麗家合同一座の外、純粹の關西歌舞伎のない事が、幾分淋しく思はれないではないが……。

然し、中座は五年振りに播磨家、紀の國家の來演浪花座は更新家庭劇の新出第一回公演、角座は、四頭目締結更生陣で、先づ、道頓堀の九月は珍らしく潑刺たる芝居陣が敷かれたわけです。

播磨家大阪久々出演に當り、東京劇文壇の諸先生より、數多の御惠稿に接した事は、讀者と共に深く感謝いたします。

まだ新秋各座の新陣容に鑑み、劇壇當事者の諸氏にも特に御寄稿を願つた更生の意氣熾んな諸氏の鮮鋭なる筆端に觸れる事は多くの讀者に喜んで頂ける

事だと思つたから……。

成駒家が巡業陣に「封印切」を出してゐる、國寶的至藝に對して、贅言は要しない、それに就いては特に、富田泰彦氏に御寄稿を願つた。「鷹治郎の藝術」が即ちその一文である、歌舞伎愛好家の必らず見落せぬものである。

京都南座出演の第一劇場に關しては、滿一ヶ年の成算と、業績を、豊岡、森田兩氏が執筆して下さい。

劇文壇諸氏や諸先輩の御援助で閑散期を抜けて、多端な劇壇の秋に際し本誌は、新秋第一陣の關西劇壇を比較的廣汎な範圍に於て纏め讀者諸君に見得る欣びに浸りながら拙筆。

住田冬和

昭和五年九月一日發行

月刊『道頓堀』第四十八年
第四十八輯

◆ 誌代は前金でお拂ひを願ひます。
◆ 郵券代用は一割増にて御註文を願ひます。
◆ 御相談の上廣告掲載の需めに應じます。

廣告取扱所

大阪電報通信社
大阪市北區中之島二丁目

廣告の御用は電通または當編輯部廣告係へ御申越し下さい

特價金參拾錢(郵費五加税)

昭和五年八月三十日印刷
昭和五年九月一日發行

大阪市南區久左衛門町八番地

松竹土地建物興業株式會社

編輯者 鳥江 鏡也

發行所 大阪市東區橋邊町一丁目

印刷者 北島 竹次郎

大阪市東區橋邊町一丁目

印刷所 桃谷印刷株式會社

大阪市南區久左衛門町八番地

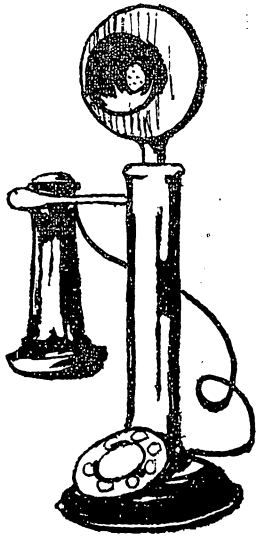
松竹土地建物興業株式會社

發行所 道頓堀編輯部

電話(二四〇番)
(六六八五番)

私設電話工事ハ

和田電機商店



逓信局指定公認

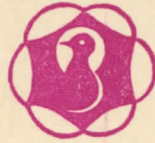
和田電機商店

工場

大阪市北區中之島常安町
電話土佐堀(44)一七八七番
振替大阪一一九〇一四番
大阪市天王寺區東上町二〇地



料理部



大阪市今橋五丁目

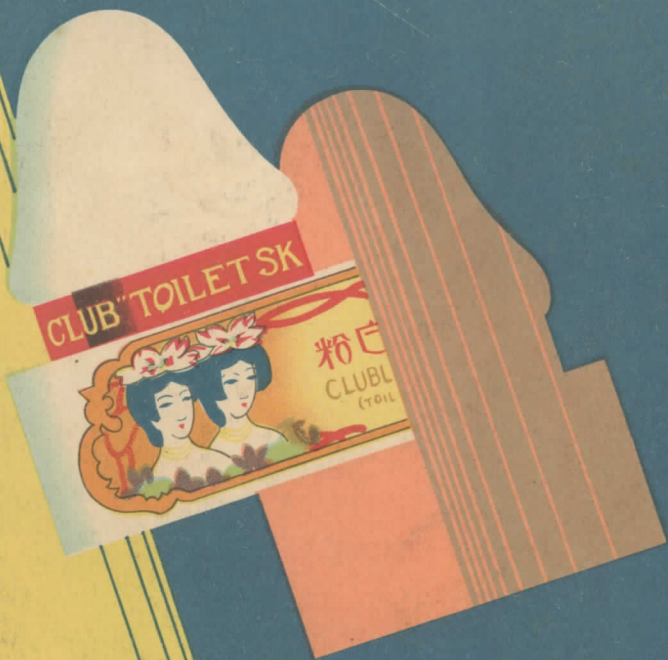
つる家本店

電話本局
二三一
六三三
三一五
二六二
番掛

の氣人いし晴素

粉白クラブ

すつきりご	水際立つた	白さ美しさ	クラブ白粉	の素晴しい	お化粧榮え
-------	-------	-------	-------	-------	-------



アレ止、日ヤケ止に一番よい

クラブ
身美クリーム

昭和二年十月廿五日第三種郵便特認可
昭和五年八月三十日即
昭和五年九月一日發行

第五年九月號

一部金參拾錢